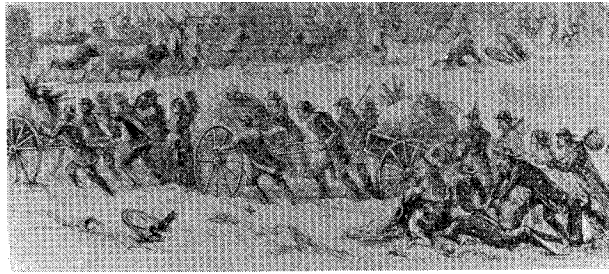
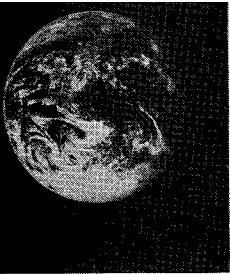


聖徒の道

7 1979



CCAC
1979



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
 N・エルドン・タナー
 マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
 マーク・E・ピーターセン
 リグランド・リチャーズ
 ハワード・W・ハンター
 ゴードン・B・ヒンクレー
 トーマス・S・モンソン
 ボイド・K・パッカー
 マービン・J・アシュトン
 ブルース・R・マッコンキー
 L・トム・ペリー
 デビッド・B・ヘイト
 ジェームズ・E・ファウスト

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア
 レックス・D・ピネガー
 ヒュー・W・ピノック

教会誌編集主幹

M・ラッセル・バラード・ジュニア

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
 キャロル・ラーセン (編集副主幹)
 ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

赤松成次郎 (翻訳部長)

も く じ

絶対的な真理 スベンサー・W・キンボール	1
燃えるしほを求めていた私 ロバート・マッキー	11
聖霊の賜 マーク・E・ピーターセン	16
質疑応答 ビクター・L・ブラウン	18
アウプーのシャツ セレサ・ブラウン	21
なんでもしつもん教室 ケイ・L・ハーベイ	24
友情 ドロシー・レオン	26
悪条件の中を飛ぶ ロバート・E・ウェルズ	29
オリンパス号による 大西洋横断 ウイリアム・ハートレー	32
出ノーヴー, 1844—47年 グレン・M・レオナード	36
ローカル・ニュース	44

表紙の説明

C. C. A. クリステンセン画。「手車をひく開拓者」

聖徒の道 7月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京都港区南麻布5—10—30
 印刷所 株式会社 精興社
 配 送 東京ディストリビューション・センター
 東京都世田谷区上用賀4—9—19
 定 価 年間予約1,700円 1部150円
 海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA0595JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0—41512

口座名 ^{まつじつ} 末日聖徒イエス・キリスト教会
 東京ディストリビューション・センター

絶対的な真理



大管長 スペンサー・W・キンボール

しばらく前になるが、教えが信じられないというひとりの若者に手紙を書いたことがある。最近、その手紙を書いた事の大切さを感じているので、この機会にその内容を皆さんにお伝えしたいと思う。自己の考えと闘っているその青年に、私は次のように書いた。

愛するジョンへ、

あなたが福音の真理に反対していることを、私は非常に心配しています。

あなたの意志に反してあなたを説得することはできません。それは私にもよく分かっています。しかし、もしあなたが幾つかの大切な真理に耳を傾け、注意を向けて下されば、そして祈りと、私の言葉が真実であるかどうか知りたいという望みを持って聞いて下されば、あなたのお役に立てると思います。私は

仮にお手伝いができるとしても、あなたの考えを無理に変えさせようなどというつもりはありません。なぜなら、自由意志は神の基本的な律法であり、一人一人が自分の選びに責任を取らなければならないからです。しかし一方、助けを必要としている人により感化を与えるために各人がその本分を尽くさなければならぬことも確かです。

主は、エノクにこのように言っておられます。『見よ、これら汝の兄弟らを、彼らはわが手に成れる工なり。われ彼らを創りし日に彼らの知識を与え、エデンの園に於て人に彼の自由意志を与えたり。』（モーセ7：32）

私は横になって、長い間静かに考えました。また、ひざまずいて、何度も心から祈りました。私が正しいことをお伝えできるように、そしてあなたが謙遜な気持ちで私の言葉を受

け入れて下さるように願っています。

人生におけるこの真実の道は、単なる考え方の相違ですませられるような問題ではありません。真理には、絶対的な真理と相対的な真理とがあります。どんな食事をしたらよいかという食事療法は、一生のうちに何度か変わります。多くの科学上の発見も年々変わっています。科学者たちは長年の間、地球は太陽から別れてできた星雲状の溶解した塊から出来あがったものであると教えてきました。ところが、後になって多くの科学者は、ちりのうず巻きが固化化したものであるという説を唱えるようになりました。地球の創造についてはこのように幾つかの説があります。それは、真理が発見されるたびに、その真理に合うように学説が変えられてきたからです。このように相対的な真理もあれば、昨日も、今日も、明日も、永遠に決して変わることのない絶対的な真理もあります。絶対的な真理は、人間の考えによって変わるものではありません。科学は、私たちの自然界に対する理解を深めてくれます。そのために、一度認められた考えでも、新しい真理の発見によって捨てなければならないことが起こってきます。しかしこのような一見真理と思えるものの中には、何世紀にもわたって頑強に保持されてきたものもあります。真摯な科学の探究も真理の入口に立ち止まっている場合が多いのです。ところが、啓示された事実は、人の本性とは何か、人生の目的は何かを理解するための糸口となる絶対的な真理を私たちに教えてくれます。

地球は丸い。40億の民全員が地球は平らであると考えているとしたら、彼らは皆間違っています。地球が丸いということは絶対的な真理だからです。仮に全員が反論を唱えたとしても、地球は丸いという真理を変えることはできません。重さのある物体はそれだけで空气中に浮くことはできません。手を離せば地面に落下してしまいます。重力の法則は絶対的な真理であり、決して変わることがあ

りません。重要な法則が小さな法則を圧倒することはあっても、真理は変わることがありません。

私たちはこのような絶対的な真理を、みたまによって教えられ、知ることができます。これらの真理は霊の世界では「独立」したものであり、経験と理性によって確認できるとしても、霊によって見いだす必要があるのです。(教義と聖約93：30参照)偉大な予言者ヤコブは、『みたま』は真実を話して偽りたもうことがない。それであるから、『みたま』は現在の事をありのままに示し、未来の事も

人はただ頭で考えただけで、神や神の道を見いだせるものではありません。自分が探究している王国を支配している法則に従う必要があります。

たありのままに示したもう」(ヤコブ4：13)と教えています。私たちは人生について、また自分が何者であるかということについて学ぶ必要があります。

私たちの天父なる神エロヒムは生きておられます。これは紛れもない真理です。仮にこの地球上の40億の人間が天父なる神について、またその属性と力について無知であったとしても、現実には神は生きておられるのです。地上のすべての民が神の存在を否定し、信じないとしても、神は実在しておられます。人がたとえどのような異なる意見を述べようとも、神は生きておられ、その姿、力、属性が人々の考えによって変わることはありません。人人の考えそれ自体には絶対的な真理を左右する力はないのです。神は生きておられます。そしてイエス・キリストは神の御子であり、全能の神、創造主、人生における唯一まこと

の道であるイエス・キリストの福音の主（ぬし）であります。学識のある人々はもっともらしい説明をつけてキリストの存在を否定し、不信仰な人々はキリストをあざけるかも知れません。しかし、キリストは今も生きて、御自分の民の行く末を見守っておられるのです。これは厳然たる真理であり、だれも否定することはできません。

スイスのある時計屋が手製の材料を使って作った時計が、カリフォルニアの砂漠で発見されたとします。その時計を見た人々は、スイスという国に行ったこともなければ、その時計屋に会ったことも、時計が作られるのを見たこともありません。けれども、人々がそれを知っていようがまいが、その時計屋が存在したことは事実です。時計に口があって、「時計屋なんていないよ」と言ったとしても、事実を変えることはできません。

人々が本当に謙遜になったら、人は真理を発見することはできても、真理を創ることはできないということが分かるでしょう。

神々は、御自身が支配し管理しておられた物質でこの地球を組織されました。これは確かな真理です。多くの知識ある人々は、自分の考えで、地球は偶然に誕生したものであると断定するかも知れませんが、しかし真理は真理です。時計が時計屋の手で作られたように、この地球は神々により創造されたのです。世の人々の考えもこの真理を変えることはできません。

神は人を造り、生命を与えて、地上に置かれました。これは事実です。だれもこの事実を誤りであると反証することはできません。頭脳明晰な人々が幾人集まってほかの考えを唱えようとも、神が人を造り、生命を与えて、地上に置かれたという事実は変わりません。キリストは御父の子供たちのために備えをした後、人生の計画を立てて下さいました。この完全な計画により、人は目的を達成し、自己を克服して完全な者となることができます。このきわめて大切な真理は、人の考え

によるものではありません。仮に人の考えだとしたら、その考えには優劣をつけることができるでしょう。しかし、私は自分の考えとしてこれらのことを申し上げているではありません。今お伝えしているのは、絶対的な神の真理なのです。

いつの日かあなたにもわかる時が来るでしょう。その時あなたは、長い間引き延ばし、時間を無駄に過ごした自分を責めることでしょう。これは万が一といったような仮定の問題ではありません。必ずその時はやってくるのです。

ある分野で経験があるから別の分野でもわけなくその道の専門家になれるかということ、そうではありません。宗教に関して言えば、専門的知識はその人の義しき、啓示からもたらされます。主は、予言者ジョセフ・スミスに、「あらゆる真理は、神の置きたまひし範囲に於て独立」（教義と聖約93：30）していると教えられました。地球の構造について多くの真理を発見した地質学者でも、家族の永遠性について神が私たちに与えておられる真理には気がつかないかも知れません。

人はただ頭で考えただけで、神や神の道を見いだせるものではありません。自分が探究している王国を支配している法則に従う必要があります。このことだけでもはっきりと理解いただけるとしたら、確かな土台を築くことができると言えるでしょう。鉛管工になろうと思えば、その仕事に関連のある法則を研究する必要があります。圧力やひずみ、変形、パイプが凍る温度、蒸気や熱湯を調節する原理、膨張率、収縮などについて知らなければなりません。ところで、鉛管に関する知識が豊富にあっても、子供の教育や人々との交際ではまったく駄目だということがあるかも知れません。また簿記には詳しいが、電気のことはさっぱり分からないということもあれば、食料品の売買には通じているが、橋を架ける知識は皆無だということもあるでしょう。

水素爆弾に関しては権威者であっても、銀行業務には無知のこともあるでしょうし、名の知れた神学者でありながら、その上時計の製造も上手にできるという人はいないでしょう。また、相対性理論を唱えた人でも、すべての法則・原理を創られた創造主については無知であったかも知れません。繰り返しますが、これは単なる考え方の問題ではありません。絶対的な真理です。これはすべての人に当てはまる真理です。

聡明な人ならば自分の希望する学問をすることができると思います。深い思索と努力さえすれば、どの分野であっても知識を得ることができます。高等学校の卒業証書を手にするためには小学校に入学してから12年かかり、大学の卒業学位を得るには普通さらに4年を要します。立派な医師になるにはそれからまだ25年近くもかかるのです。それなのに、法則に従って実際に生活してみなくて、どうしてもっと深遠な霊性を身に付けられるのでしょうか。あなたは、神の律法のひとつも守っておらずに、宗教対談を行なっている人を見かけたことがあると思います。神の律法に従おうともせずに、世の人々に対して人生を説こうとしているのです。何と愚かしいことでしょうか。

にもかかわらず、資本家や政治家、大学教授、ギャンブルクラブの所有者といった人々の中には、自分がある分野で人より優れていることで、まるで何でも知っているかのように思っている人がたくさんいます。人は、神の律法に従ってはじめて神御自身を知り、また神の計画とみ業を理解することができるのです。霊の世界は自然界が存在するように確かに存在します。けれども、この世の法則では理解することができません。セミナーで発電機の作り方は学ばせぬ。同じように、医薬品の研究所で霊的なことに関する真理を学ぶことはできません。霊的な真理を学ぶには、霊的なことを扱う研究所に行き、そこにある設備を使って、定められている法則に従

わなければなりません。そうすれば、科学者が金属や酸やその他の成分を知っているのと同じように、あるいはそれ以上に確かに、霊に関する真理を知ることができるのです。職業は二の次であって、鉛管工であれ銀行家であれ農業従事者であれ問題ではありません。最も大切なことは、自分の過去と未来について何を知っており、信じており、またそのために何を行なっているかということなのです。

私たちが完全に組織された霊の存在として、天父について考え、学び、理解することのできる状態であった時、天父は私たちに次のように言われたと思います。「私の愛する子供たちよ。お前たちはこれまで霊の状態であって精一杯の進歩をしてきた。さらに成長を続けるためには、肉体が必要だ。そこで、お前たちが引き続き成長できるように、ひとつの計画を用意するつもりだ。よくわかっていると思うが、人は物事を克服してはじめて成長できるのである。」

すると、主がこう言われました。「では、私たちは手元にある元素を組織して地球を創造し、植物と動物を置こう。あなた方は降りて行きなさい。そこはあなた方の試しの場となる。私たちはあなた方に恩恵と喜びをもたらすため、よく準備された豊かな地球を与えよう。そして、あなた方がそれらを正しく使い、命じられることを行なうかどうかを見よう。私はあなた方と約束を交わそう。もしあなた方が自分の欲望を制し、私が与える計画に従って完成への道すなわち神への道を歩み続けることに同意するならば、私はあなた方に骨肉の体と、豊かで実り多い地球、太陽、水、森、金属、土、その他食物、衣服を得るために必要なすべての物を与え、住居をあてがい、またふさわしく、あなた方のためになるあらゆる楽しみを与える。またそれに加えて、あなた方が障害を克服し、完成を目指して自己の人生をより良いものとするならば、最後に再び私のもとに帰ることができるようにしてあげよう。」

この上なく寛大なこの申し出を、天父の息子、娘である私たちは感謝して受け入れました。そして、地上の両親によって肉体が用意されると、順番にこの地上にやってきました。そして今私たちは試しを受けているのです。そうです。私たちは今、試しの場にいるのです。これもまた確かな真理です。それは否定しようのない、そして争う余地のない事実です。この論争の余地のない真理を受け入れることができはじめて、その人は試しの生涯つまり実践の生活を始める備えができたといえるのです。

またここでは詳しく述べることはできませんが、さらに大切なことが2、3あります。まずアダムとイヴは律法に背き、そのために彼らの子孫すべてにひとつの変化が起こり、死すべき体になったということです。この変化は食物が変わったために起きたのでしょうか。ともかくも、今私たちの体内を循環し生命を維持している要素となっている血液が、それまでふたりの体内を流れていた微細な物質に取って代わったのです。そしてふたりは今の私たちのように死すべき体となり、病気や苦しみ、果ては死と呼ばれる肉体の崩壊さえも受けることになりました。しかし、肉体と霊との二元性を持つ人間にとって大切なのは霊であり、霊は肉体を超越します。霊はさらに経験を積むための霊界に行くのであって、分解してしまうものではありません。十分に準備をした後、霊と肉体は再び相合して、霊は再生された骨肉の体に永遠に宿るのです。このようにして、再び相合した肉体と霊は二度と離れることはありません。その体にはもはや分解したり苦しみを引き起こしたりする血液というものはありません。微細な物質が肉体に生命を与え、不死不滅の体とするのです。

この復活は救い主イエス・キリストのみ業です。救い主はマリアの子供として死すべき資質を、また神の御子として不死不滅の力を受け継いでいたので、肉体を支配する力に打ち勝つことができました。救い主は実際に御

自分の命を捨て、そして文字通り再び生命を得られました。その結果、すべての人が復活できるようになったのです。救い主は神として御自分の命を犠牲にされたのです。だれもこの命を救い主から取り去ることはできませんでした。救い主はあらゆることに打ち勝ち、その完全さによって御自分の命を再び回復する力を得られました。救い主の最後の敵は死でしたが、救い主はそれにも打ち勝ち、復活されたのです。これは絶対的な真理であり、世界中の理論家が結集してもこの真理を打ち破ることはできません。それが事実だからです。

救い主は、十字架にお掛かりになる前に、主のみ業を進め、主の計画を世の人々に教え、人々に永遠の計画に従うように勧めるためには、正式に権能を授けられた人々の組織が絶対に必要であることを御存じでした。そこで救い主は御自身に忠実な人々の中に教会を設立し、民を指導するために使徒、予言者、その他の役員を置かれました。そしてそれらの役員を世に遣わし、力によらずに真理を説くようにして下さったのです。なぜなら、この世の基本となる律法は自由意志だからです。確かに人は自由意志によって自分の好きなことをすることができます。しかし自分が犯した過ちに伴う罰から決して逃れることはできません。

続いて主は完全な組織計画に基づいて民を導くための原則と教えを示し、儀式を施すための完全な権能を役員に委任されました。救い主はその当時あった既存のすべての宗教団体は無論のこと、人の作った教えや哲学をもすべてかえりみずに、神の御計画を示されました。これは真実です。仮に、世界中の様々な理論を提唱する人々がすべて信じなくても、真実は真実、絶対的な真理なのです。

主はカルバリに向かう前に、まだできあがって間もない小さな組織が人間の哲学ややがて起こる激しい迫害に長くは抵抗できないことを御存じでした。けれども、主は何人かの雄雄しい使徒たちに王国を築き導く権能を委ね

られました。救い主が背教の起こることを知っておられたことは疑うべくもありません。そして実際に背教は起こりました。

迫害は耐え難いものでした。使徒たちは殉教したと言われています。そのほか、神権者も一般の教会員も多くの人が、不信者による拷問に苦しみました。こうして主の教会は肉体的な恐怖によりほとんど滅亡してしまったのです。その後、まだ真の改宗にはほど遠かった異教の支配者によって、キリスト教は受け入れられ、一般民衆の間に広まって行きました。諸国民にキリスト教を受け入れさせるために、異教の迷信や教えがキリスト教の教えに付け加えられ、その結果真の教会の教えや儀式は少しずつ変えられて、真理とはほど遠いものになりました。権限を授けられた僕たちが殉教し、権能も教義も失われたことによって、世界は暗黒時代に入ります。この時代に、神と神の計画を正しく理解している者

はこの地上になく、闇は民を覆い、霊的面では言うまでもなく、物質的な面においてさえ進歩はまったく見られませんでした。

教義が歪められ、神権が失われ、教会が腐敗し、そして神の知識が失われたとすれば、その覚醒の時が必要です。こうして、予言者ダニエルが1千年前に予言したように、真理がついに回復される時が到来したのです。そして今後は二度と失われることはないのです。そのように約束されているからです。たとえ人々が墮落することがあっても、主の教会と福音は終わりまで残ります。この世と地獄のすべての力をもってしても二度と完全な背教に追いやることはできません。この大いなる回復は、アダム、エノク、ノア、アブラハム、モーセ、主イエス・キリストへと続く予言者ジョセフ・スミスによって実現しました。それが、救い主の啓示を通して組織された教会、すなわち末日聖徒イエス・キリスト教会です。



この教会はイエス・キリストからの啓示によって組織され、完全な権能と完全な計画が与えられている教会です。

このようにして、19世紀初期に、「不思議な驚くべき業」が再び世の人々に紹介されました。世の悪に染まらず、人間の誤った教えに害されていない若き予言者ジョセフ・スミスが、回復の器となったのです。ほかの神権時代と同様に、特にイエス御自身が回復に当たられたひとつ前の神権時代がそうであったように、真理の小さな種は山のような偽りと戦わなければなりません。神も啓示の力もない人間の手によって組織された教会が、至る所におびただしく存在していたからです。そこにあるのは過去十数世紀の腐敗した教えでした。宗教上の混乱が支配し、ほとんどの人々はみ業に激しく反対して、回復された真理が告げられると、ジョセフ・スミスに「偽予言者」呼ばわりさえするようになりました。しかし1830年にわずか6名で設立されたこの小さな組織は、わずかの期間に驚くべき発展を遂げ、今や400万人を数えるまでになっています。このイエス・キリストの教会は、神により完全に承認された「唯一の真にして生命ある教会」であり、神に代わって行なう権能によって正式に組織された唯一の教会です。そしてまた、人々に信じ難い力と驚くべき王国をもたらす完全に幅広い真のプログラムを有する唯一の教会でもあります。

これは絶対的な真理であり、だれも反証することはできません。地球の形はほぼ球形であり、しかもその地球に重力があることが真実であると同じように、これは真実です。また太陽が輝いているのが真実であるように、また私たちが実際に生きていると同じように正真正銘の真理なのです。世の中のほとんどの人はこの絶対的な真理を信じません。聖職者たちはその真理を反証しようとしています。また、知識人と言われる人々は、絶対的な真理の存在しないことを正当化しようとさえ考えています。しかし、もし世界中の民が絶え、

諸々の聖職者が土に消え、高度な教育を受けた人々が墓に眠ったとしても、真理は進み行き、教会は引き続き勝利を収め、福音は変わらないでしょう。

主は真理を定義して、「事物の現在あるがまま、過去にありしまま、未来にあるがままの知識なり」（教義と聖約93：24）と言っておられます。神の存在は真実です。不死不滅も真実です。これらの真理は、私たちが異なった考えを持っているからというだけでは失われません。また、だれかが疑問に思っているからというだけで破られるものでもありません。

もちろん、違った考えを持つ人もいますでしょう。しかしもう一度申し上げますが、考えによって法則すなわち絶対的な真理を変えることはできないのです。人の考えで地球を平らなものであるとすることはできませんし、太陽にその光を薄暗くさせることも、神は死んだ、あるいは救い主はもはや神の御子ではないとすることも決してできないのです。

ところで、かつてジョセフ・スミスが問うたと同じように、多くの人々によって尋ねられる良い質問があります。それは、「もし信頼すべき、主により認められた神の教会があるとするならば、それはいずれであって、どうしてそれが分かるのか」という質問です。

主はその鍵を与えられました。あなたもいずれおわかりになると思います。疑うことは何もありません。どうぞ定められている手順に従って下さい。そうすれば、これらのことが絶対的な真理であるという確かな知識を得ることができるでしょう。必要な手順は、研究し、考え、祈り、そして主の戒めと教えを守ることです。啓示がその鍵です。あなたが定められた条件に従い、へりくだって受け入れようとさえするならば、神は確かな知識をあなたに与えて下さいます。一切のプライドをかなぐり捨て、神のみ前にあなたの心の内を打ち明けて、謙遜になり、聖霊の教えに身をゆだねる時に、はじめて教えを受ける準備ができたと言えます。先入観に執拗にとらわれ

ていては教えを受けることはできません。主は、人が自己を正しい心の状態に置くことができはじめて霊的な事柄に関する知識を与えると、繰り返し約束しておられます。熱心に求め、探し、尋ねなさいと、主は勧告しておられます。このような主の約束は数多くありますが、モロナイの次の言葉に要約されると思います。「そして聖霊の力によって一切の事の真実であるかどうかをあなたたちに解る。」

(モロナイ10：5) 何という素晴らしい約束でしょうか。本当に素晴らしいことです。

繰り返しますが過去にこの地上に生を受けた人も、今生きている人も、これから誕生する人も、すべての人が降伏する時が来ます。それは力によらない無条件の降伏です。あなたにとってその時はいつですか。きょうですか。20年後ですか。200年後ですか。2,000年後、それとも100万年後ですか。ジョン、あ

ジョセフ・スミスは森に入り、ひざまずいて長い間祈りました。そして、エロヒムが神であり、イエス・キリストがその御子であるという知識を得ることができました。その確信は、進んで殉教の道を選ばせるほど強いものでした。

あなたにもう一度申し上げます。あなたはいつか必ずこの偉大な真理の前に降伏することでしょう。あなたがいつまでも真理の力に抵抗できるはずがないからです。それなら今降伏してはどうでしょうか。すでに多くの時間を無駄にしているのではないですか。そうすればあなたにとって、これからの人生はこれまでも増してはるかに素晴らしいものとなるに違いありません。

奴隷の自分に生まれ、「これが人生だ。これ以外によい生活はない。十分満足のできる毎日だし、からだを休める十分な場所もある」と考えるよりほかに何も知らなかったイスラエル人は、何と愚かであったことでしょう。海を渡り砂漠を越えれば約束の地が待っている。そこは豊かで、自由を得られる地である。また自分の行く末を決めることができ、余暇や文化を楽しみ、進歩と成長がある。そして

すべての民は心に義しい望みを持っている。このように言われても先のイスラエル人のような状態を好む人は、先が見えないのです。これがどうでもよいですまされることでしょうか。光と闇、成長と衰退、巨人と小人、自由と奴隷、永遠と一日、生と死、これらの間の相違は何でしょうか。

さて、ジョン。私は心からへりくだって、あなたとこの話を耳にするすべての方々にこのメッセージを送ります。あなたがこれらのことを拒まないでよく考え、また祈ってくれることを、心から願いながら。心を開き、誠心誠意で、望みをもって尋ねてください。あなたが努力を怠らない限り、必ず確信が与えられます。これは真実です。私はそのことを知っています。あなたに厳重な警告を与えます。そう遠くない将来裁きの法廷に立った時に、あなたは私があなたの永遠の幸福を思って真

実を話したことが分かるでしょう。私があな
たにこのようにわかりやすくお話ししようと努
めたことをどうか忘れないでいて下さい。こ
の真実の教会の会員ならびに代表者には、い
つでも、どのような質問にもお答えする準備
ができています。私は心からお約束します。
もしあなたが心を開いて勉強し、祈るならば、
あなたは光明を受けるでしょう。夜の闇が消
えて新しい一日の夜明けが来るように。

今一度、教会は喜んであなたを助ける用意
があると申し上げます。しかし私はこの
ことをあなたに押しつけたり、無理強いした
りするつもりはありません。あなたはもう立
派な大人です。良識もあり、知識や経験も豊
富です。それに若い時に真理の種をまいてい
ます。天地のすべての力をもってしても、無
理やりあなたにこの知識を植え付けることは
できません。またこの知識は、望んでも努力
しなければ得ることはできないのです。注意
深く、偽りのない、心からの研究によって得
なければならないものだからです。教会は、
あなたが必要とすればいつでも援助を提供す
る用意ができています。

あなたはこの勧告と警告を無視することも
できます。しかし、その責任はあなたにあり
ます。もしあなたがこの警告を無視するなら
ば、あなたは創造主に対して申し開きをしな
ければならないでしょう。それは私も同じで
す。私は最善を尽くしてお伝えしています。
私は、この教えが神の承認を受けた唯一の完
全で神聖な永遠のプログラムであることを知
っています。

ジョセフ・スミスは森に入り、ひざまずい
て長い間祈りました。そして、エロヒムが神
であり、イエス・キリストがその御子である
という知識を得ることができました。その確
信は、進んで殉教の道を選ばせるほど強いも
のでした。

パウロはダマスコへ行く途中、ひとりの天
の栄光をもった御方にまみえ、その声を聞き
ました。しかしパウロはそのような類まれな

顕現を受けてさえも、イエス・キリストと御
父、また永遠の計画や福音の神聖さに対して
一点の疑いもない知識を求めて祈りました。
そしてついに、命がけてそれを教えようとす
るまでに、はっきりと確信したのです。石を
投げられて危うく死にそうになったこともあ
りましたが、再び力を与えられました。パウ
ロは飢えや渇きや迫害に苦しみました。その
上、自分が殺されることを重々承知していなが
ら、堂々と死に甘んじました。パウロは、こ
のように真理のために自分の力や時間や才能
ばかりでなく、命さえも捧げたのです。パウ
ロは当時あるいは今日の聖人や医師以上に、
人の霊を幸福にし、癒しと救いをもたらす真
理を知っていました。彼は神が実在し、イエ
スがキリストであり、福音が永遠の生命への
道であること、また死すべき世と、決して終
わることのない不死不滅があることを知っ
ていました。また、永遠の報いが現世の楽し
みを犠牲にするだけの価値のあるものだとい
うことも知っていました。

あのジョセフ・スミスやパウロやペテロの
ように、そしてまた大勢のあなたと同年輩の
人々のようにあなたもはっきりと知ることが
できます。この教会はほかの教会とは違いま
す。これは主の教会です。また、何か別の教
えでも哲学でもありません。イエス・キリス
トの教会であり、イエス・キリストの福音な
のです。

父なる神は生きておられます。御子も生き
ておられます。私はこのことを心から確信し
ているので、いつでも声を大にして証したい
と願っています。この証をもって、私は喜ん
で来世に行き、神にまみえたいと思っていま
す。イエス・キリストのみ名によって証しま
す。アーメン。

燃えるしばを求めていた私

ロバート・E・マッギー



私は数年前にソルトレーク盆地へ引っ越してきて大きな衝撃を受けた。当時、私はモルモンについてほとんど知らず、「西部のどこやら」に住んでいて西部開拓に貢献した人たちという程度のいかげんな知識しか持っていなかった。その位の興味と知識しか持っていなかった私が、何と、モルモンばかりの州にやってきて住むようになったのである。

私が特定の宗教に関心を持たないのは、多

分に私の生き立ちに原因があると思う。私の父は監督教会の信者であったが、私が9歳の時に亡くなり、その後私は宗教とは関係の薄い孤児院へ預けられた。そこでの生活を通して私に特定の宗教を選ばない性格が植え付けられ、その後も私は何度かいろいろ違った教会に行き、その都度それぞれの教会からいいものを得てきた。

新しい家に移ってしばらくすると、私と妻

にはモルモンがどういう人たちかということが少しずつわかってきた。そして内心、人の良いモルモン教徒から熱烈な勧誘を受けるのを期待するようになった。しかし、一向にその気配はない。私が知っていたモルモンたちは皆友好的であるが、教会のことを積極的に売り込むといったことはない。そこで私の方から質問してみたが、どうもびんとくる答えが返って来なかった。

そんなある日、私はディック・ライズナーという人に会った。立派な家族に恵まれた彼は、1年の訓練期間中、指導教官として私を指導して下さることになった。私は彼の熱心なモルモンとしての姿に深く感銘した。彼は何よりも自分の信仰に忠実であった。その彼から、末日聖徒イエス・キリスト教会のことをどれだけ知っているか尋ねられたのである。その頃までには、私はモルモンについてかなり勉強していた。教会の初期の頃の歴史を読んで、管理形態と教義のおおまかなところも知っていた。

一番の障害は信仰の原則であった。私は、神がダマスコへの路上で罪人サウロに現われ、また燃えるしばの中からモーセに語りかけたもうたのならば、自分にも同じように姿を現わして下さってもよいものだと思っていた。いったん信じさえすれば、自分だって神の熱烈な擁護者、有能な建設者になれる。だから自分の改宗は燃えるしばのように劇的でなければならない、と自分に言い聞かせていた。

ユタでの訓練も間もなく終わり、私たちはフロリダ州のセント・オーガスチンへ移った。

ところが時間がたつにつれて、ユタ、特にユタの人たちがなつかしく思われるようになってきた。そこで電話帳をめくり、近所にモルモン教会がないかどうか調べてみた。すると一番近い教会でも家から65キロも北に行っ

た所にしかない。あきらめるしかなかった。まだ、どうしても行きたいというほど教会を求めてもいなかったからである。

ある日、私は疲れ切った体で早めに仕事から帰ってみると、妻は台所で忙しそうに働いていた。

「きょうはお客様がいらっしゃったのよ。」
妻がにこにこしながら言った。

「ああそう。だれ？セールスマンかい。」

「そう。……そんなところね。」

「だれだね？」

私は神がダマスコへの路上で罪人サウロに現われ、また燃えるしばの中からモーセに語りかけたもうたのならば、自分にも同じように姿を現わして下さってもよいものだと思っていた。いったん信じさえすれば、自分だって神の熱烈な擁護者、有能な建設者になれる。

「モルモン教会の宣教師よ。」

「まさか、冗談だろ。」

「いいえ。パンフレットを置いていらしたわ。ごらんになったら。電話番号も載っているから。」

「じゃあ、早速電話しよう。きっとびっくりするだろう。」

妻は笑った。私は電話をかけて宣教師たちを招待した。彼らの話では隣り町にあるオッドフェローズ・ホールで支部の会合が開かれているということだった。近くに教会がないなんて、勝手に早合点していたのだ。私は礼を言って電話を切った。

私たちに会いに来たふたりの青年は、6週間にわたって毎週1回簡単なレッスンをしたと言った。断わる理由もない。モルモンと

親しくなれるのなら、安いものだと思った。

おまけに物のわかる人たちと討論ができる。

日曜日のことである。私たちは朝早く起き、上機嫌で4人の子供の支度に取りかかった。

しかし、予定よりも時間がかかってしまった。

オッドフェローズ・ホールの駐車場に入るところで、妻が「遅刻だわ」と言った。

「それじゃあ、ここで待ってようか。正面がどっちかわからないし、入ったところでみんなに正面から見られたんじゃないからね。」

しかし、そこへ感じのいい紳士が車から降りてきて、「支部長です」と自己紹介した。私たちが遅刻しそうなのを予測して待っていて下さったのである。

子供たちはそれぞれの教室へ案内され、私たちも求道者クラスに出席した。教師は見ながらに学識がありそうで、レッスンを熟知していた。そのように豊かな知性を持った人が教会に所属し、しかも神への信仰を堂々と述べているのを見て、私は自分の考えを改めなければならぬと思った。

その日は楽しかった。教会へ行ったお陰で家族のつながりが深まったように感じ、支部の人々の謙虚な態度に心が洗われ、自分もやってみようと思えるような何かを感じた。

それから間もなくして、ユタ州で知り合った会社の同僚デニス・ヒルと話す機会があった。私は彼に、自分も今教会に行っていると言った。私がただ教会の人が好きだから行っているのだと言っても、彼は聞かず、それではということで私に一冊の本を送ると言った。

そして翌週、リグランド・リチャーズ著の「奇しきみわざ」という本が届いた。しかし私は、いつか読もうと、それを本棚にしまい込んでしまった。

3週目の日曜日、疲れもあって私たちは教会を休んだ。その時は、「どうしたのですか」と尋ねてきてくれる人がいなかったの、いささかがっかりした。

ところが月曜日の夜に電話があった。宣教師からだった。

「日曜日においでにならなかったの、とても残念です。」

「そうですか。でも、宣教師さんたちはよくそういう経験をなさるのでしょう。」

「はい。」それから少し間をおいて宣教師はこう言った。「レッスンを6回聞いていただくお約束でしたね。すぐに始めたいと思うのですが。」

「はい、いいですよ。明日の夜はいかがですか。毎週火曜日というのはどうでしょう。」

これがそもそも私たちの友情の始まりだった。子供たちは信仰と幸せのかおりをただよわせているこのふたりの青年が大好きになった。

私は、宣教師が働きかけてくる心理的な攻勢に、彼らの練習台にでもなればと思って協力していた。しかし開会や閉会の祈りを頼まれた時は、どうしてもそれに応じることができなかった。だれかの祈りを聞くのは大いに結構だが、自分に確信のない神に祈るのは偽善だと思ったからである。

次の日曜日は、フロリダ州ジャクソンビルでステーキ部大会が開かれ、話し手はほかでもない、リグランド・リチャーズ長老だということだった。私は本棚から彼の本を取り出すと、早速読み始めた。(著者の話が聞けるからには、当人についてなるべく多くのことを知っておきたいと思った。)当日、私はよく見聞きできるように2階の^{まじ}棧敷に陣取った。そして私は話し手の鋭い知性に感銘を受けた。しかしそれ以上に、彼の誠実さと確信と信仰

なぜ、私は突然にバプテスマの決心をしたのだろうか。それは、燃えるしばを求めするのは間違っていることを知ったからである。燃えるしばを求めあまりに大切な何かを見失っていたことに気づいたのである。恐らくその答えは、私の身に起こった簡単なひとつの事件に隠されているような気がする。

に感動した。

宣教師のレッスンはその後も続き、私たちは福音がどういうものかということをよく理解できるようになってきた。4回目のレッスンを受ける頃から、宣教師が私たちのバプテスマを計画していることをうすうす感じていた。

「だめだよ！」私は妻に言った。「祈りみたいに簡単なことさえ信じていないのに、とんでもない話だ。」妻も同感だった。

宣教師はやがてバプテスマの日取りがすでに決められていることを告げ、バプテスマの話を持ち出してきた。「バプテスマをお受けになりませんか。」

「いいえ、その気はありません。」

彼らは続けて言った。「そうですか。今週の金曜日に2人の方がバプテスマをお受けになります。出席していただだけませんか。」

「場所はどこですか。」

「ここから50メートルほど行ったところの海岸です。」

「海で！」妻がびっくりして言った。「こんなに寒い時期にですか。」

「はい、その通りです。」宣教師たちはいつでも平然としている。

私たちは出かけて行った。バプテスマ会のあとで、宣教師が私たちにこう尋ねた。「どうですか。ごらんになっていてバプテスマを受けたいという気になりませんでしたか。」

「いいえ！」と私は答えた。そのような気持ちが起こらなかったからである。

同じ頃、長老たちはジョン・ハッチ、ルイズ・ハッチという幸せそうな若夫婦にも福音を教えていた。

彼らには教会でちょっと会っただけであるが、快活で誠実な印象を受けていた。私たちが最後の6回目のレッスンを受けた時、そのハッチ夫妻が次の金曜日にバプテスマを受ける予定であることを教えられた。その日はたまたま復活祭前の金曜日にあたり、キリストに感謝の意を表わす意味でもその日がバプテスマを受けるには最高であった。しかしそれでも、私はバプテスマを受ける気持ちになれなかった。私は依然として、燃えるしばを求めていたのである。

6回目のレッスンが終わるにあたって、長老たちはどうしたのか、私に祈ってほしいと言った。ところが、私は自分でも驚いたことに、素直に「はい」と返事をしてしまったのである。祈りの後、驚きのさめやらぬ宣教師たちは私に感謝を述べた。その夜、私はじっくりと考えた。

その翌日、私は出勤する前に勇気をふるって、大きく深呼吸をすると妻にこう言った。「金曜日にバプテスマを受けることに決めたら君も一緒に受けてほしい」と。妻は屋根が吹き飛ばされたか、フロリダが海に沈み始

めたかというほどの驚きようで、こう言った。

「私は遠慮するわ！」

「どうして？」

「だって、海の水は冷たいでしょう。」

「そうさ。でも、決めたんだ。たとえ君がいやと言っても、とにかくぼくは受けるからね。今晚僕が帰るまでに考えておいてくれ。明日、長老たちのところへ行行って、着るものごとをお願いしてくるから。」

私は戸口に立ちつくす妻にキスをして、出勤した。しかし、夜まで彼女を不安な状態に置いておくのも酷なような気がして家に電話をかけてみた。

「決まった？」

「あなたひとりだけバプテスマを受けさせることできないわ。」

「そう、よかった。今晚、宣教師に話すよ。帰るまでに、子供たちはどうするか聞いておいてくれるかい。」

上のふたりの男の子も、一緒にバプテスマを受けることになった。(下の2人はまだ小さかった) こうして私たちは金曜日にバプテスマを受けたが、あの日水から上がって以来、私は自分の決定が正しかったことを一度も疑ったことはない。

しかし、なぜ私は突然にバプテスマの決心をしたのだろうか。それは、あの6回目のレッスンがあった晩に、燃えるしばを求めるのは間違っていることを知ったからである。燃えるしばを求めるときあまりに大切な何かを見失っていたことに気づいたのである。恐らくその答えは、私の身に起こった簡単なひとつの事件に隠されているような気がする。

私はバプテスマを受けると決心した1週間前のことを思い出した。その日も教会に遅刻してしまっただけで、ところが、まだ少年のエディー・マークル兄弟が私たちのためらいを吹き払うように握手で歓迎してくれた。その時、私は彼に強い信仰を感じて心を動かされた。

それはイエスがトマスに言われたような信仰だった。「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである。」(ヨハネ20:29) 私はそのような信仰を求めようと決意したのである。

私はこれまでも同様の感銘を受けたことが幾度かあった。しかし奇跡を求める気持ちが強く、どうしてもみたまのささやきに聞き従うことができなかった。教会員との出会いは必ずしも劇的なものではなかったが、それら一つ一つが大きな意味を持っていた。

すべての人が、その人なりに飾り気のない強い信仰を示して下さった。ディック・ライズナー兄弟はその種をまいてくれた。デニス・ヒル兄弟は本を送ってくれ、宣教師たちは家のドアを叩いてくれた。プレスラー支部長は最初の日曜日に私たちを待っていてくれた。またリチャーズ長老は靈感あふれる言葉を述べて下さり、エディー・マークル兄弟は握手でもって私たちの気持ちを和らげてくれた。だれもが模範によって力強い証の光を輝かしていた。暗闇の中にいた私は、「燭台のあかり」(ルカ11:36)のような模範によって真理に導かれたのである。

モルモン教徒は家族を愛する。私はそれが何よりも好きである。事実、信者全体がひとつの家族のようで、互いに愛し合い学び合いながら、しかもその中に決して揺らぐことのないイエス・キリストの福音を持っている。彼らには燃えるしばなど必要ではない。私たちには自由意志があり、信仰のない闇を選ぶこともできれば、闇を信仰で絶えず明るく照らすこともできるのである。しかしモルモン教徒には信仰がある。そして、その同じ信仰を私も今持っている。

ロバート・E・マッキー アメリカ空軍で契約事務に携わっている将校。4児の父、バージニア州リッチモンド・ステーク部の長老

聖霊の賜

マーク・E・ピーターセン



教 会員はみなバプテスマを受け、水と霊によって生まれる。すなわち、教会員として確認される時に、「霊のバプテスマ」を受けるのである。それは私たちの生涯を導く清い力であり、私たちはそれを聖霊の賜と呼んでいる。

私たちはだれでもふさわしい生活をし、祈り求めるならば、この賜によって靈感を受けることができる。学校で学ぶ時、友達を選ぶ時、そのほか日々の生活の中で様々な決定を下す時に、私たちは聖霊の賜を通して助けを得る。

この賜は、伝道をする時にも偉大な力を与えてくれる。例えば、私がかつて宣教師であった時、アイダホ州ルバートから来た素晴らしい同僚がいた。名前はヘンリー・L・ベーカー長老と言い、私たちはカナダ東部にある小さな町で一緒にチラシを配った。

私たちがある家の玄関でドアをノックすると、ひとりの婦人が出て来て、私たちを中に招き入れてくれた。私たちはいつも玄関で交わす紹介の言葉を述べる間もなかった。婦人は私たちを家に入れるやいなや、「ところで、お持ち下さった本はどこにございますでしょうか」と尋ねた。

私たちはあっけにとられてしまった。すると、婦人は早速、事のいきさつをこう説明してくれた。彼女は前の晩に、私たちが家にやって来る夢を見たのだという。はっきりした夢だったので、玄関へ向かってくる私たちを見た時に、すぐにそのことを思い出したそうである。彼女は夢の中で、私たちが家族を救いに導く1冊の本を持っていることを知らされていたのだった。

私たちはすぐにモルモン経を彼女に手渡し、その本についてしばらく話し合った。そして家族と引き合わせたいからその夜もう一度来てほしいと言われ、私たちは家族に紹介された。こうして家族はしばらく勉強して教会に入り、今もみな忠実に信仰生活を送っている。

20年ほど前になるが、私はウルグアイのモ

ンビデオに行つて伝道部を回り、その町で、最初の礼拝堂を献堂する責任を受けた。前年にデビッド・O・マッケイ大管長が鉋入れ式を行ない、献堂も自分でしたいと望んでおられたのであるが、仕事の都合で私が派遣されたのであった。

献堂式が終わると、ひとりのイタリア人の姉妹が握手を求めてきた。彼女は私と握手する前に右の掌を開いて、私に、見て下さいと言った。別段変わったところはない。すると彼女はその掌にある傷跡を指してこう言った。

「マッケイ大管長がこの礼拝堂の鉋入れ式にいらっしゃった時、この右の掌には癌ができていました。癌は広がる一方でお医者様たちはさじを投げていました。でも私は、マッケイ大管長のお手に触れればきっと癒されると、聖霊によって感じたのです。

大勢の人が大管長にあいさつをするために前へ出て行くので、私は少し気後れしました。しかし、握手したい気持ちはますます高まってきました。確かにそれは聖霊の勧めでした。私は大管長にお会いしました。右手は包帯をぐるぐる巻いていたので、左手で握手をしました。

それから、家に帰って包帯を取ってみると、癌腫瘍が乾いていたのです。私は飛び上がって喜びました。ごらんの通り、今ではすっかりよくなりました。このことをマッケイ大管長にお伝えしたいのです。」

私はこれと似たような経験を、何年か後にアイダホでもしている。ステーキ部大会に出席した時のことである。日曜日の午前の部の後で、ひとりの監督が年老いた母君を私のところに連れてこられた。私は午前の部でモルモン経について話をしたので、手にまだモルモン経を持っていた。

この老婦人は私からその本を受け取ると、ページをめくつてその1節を読んでから私に返した。私にはそのわけがわからなかった。彼女は、「前回のステーキ部大会に十二使徒補助のトーマス・E・マッケイ長老が訪問さ

れたのですが、マッケイ長老を御存じでしょう」と聞かれた。「もちろん、知っています」と答えると、彼女はこう言った。「私がこの本を読めたことを、どうぞマッケイ長老にお話下さいませ。この前の大会に長老がおいで下さった時、マッケイ長老はわざわざ家に来て、私を祝福して下さいました。私の目が見えなかったからです。ですから今、こうしてあなたの本が読めたことを、どうか長老にお伝え下さいませ。」

聖霊の力は、用い方次第では末日聖徒の大いなる力の源となる。聖霊は人々を癒す神聖な力となるだけでなく、私たちの日々の活動を導く力ともなるからである。

人は皆良心というのを持っている。良心が何かを避けるように告げる時、あるいは問題を起こして反省を促される時、それはみたまの力が働いているのであり、私たちに救いをもたらそうとしているのである。

神の栄光は英知であり、人類の栄光もまた英知であることを忘れてはならない。神のみたまが働きかける時、私たちは、霊に光と導きを与える神の英知から助けを受けるのである。

救い主は、聖霊が真理のみたまであり、真理のみたまは「あなたがたをあらゆる真理に導いて……きたるべき事をあなたがたに知らせる」(ヨハネ16:7—16)と教えられた。

私たちは生涯の間に大勢の師に巡り合うが、聖霊ほど重要で、最良の師はいないであろう。聖霊は神会の御一方であり、私たちが正しい行ないさえしていれば、どこにいても助けと力を与えて下さる。

私たちは教会員として確認の儀式を受けることを当然のこととしてあまり深く考えない。しかし、確認の儀式は悪の防壁となって人生の行く先を明るく照らす聖霊の賜を得る唯一の方法であることを、私たちは忘れてはならないのである。

質疑応答

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり、
教会の教義を公式に宣言するものではありません。



管理監督

ビクター・L・ブラウン

私は個人的な問題で悩んでいます。友人は専門のカウンセラーに相談に行くように勧めますが、私は監督のところへ行くべきだと思っています。どちらが正しいでしょうか。

スペンサー・W・キンボール大管長が十二使徒評議員会の会員であった時に、この質問に関連のある重要な勧告を与えています。したがって、ここでは「監督と専門のカウンセラー」というテーマでキンボール長老が精神病の治療に携わる末日聖徒に与えた説教から引用してみたいと思います。

「監督に聖任されると永遠にその職から解かれることはない。監督がその職を解かれるのは、破門のような教会の懲戒処分を受けるふさわしくない行為をした時のみである。

監督として召され按手聖任されると、彼はイスラエルの判士となり、数多くの決断を下す責任を持つようになる。しかも、それらの決断が、彼の管理する人々の生活や進歩成長に多大の影響を及ぼすのである。監督は会員の霊にかかわる活動を管理し、彼らに成長の機会を与えてその達成度を評価する。また、特定の祝福や特権を受ける資格があるかどうか判断する。監督はこの世のすべての神殿に通じる鍵を握っている。それは、神殿結婚を経由して永遠の生命へと至る扉を会員のために開く鍵である。

ワード部の霊の指導者の職業を見ると、鉛管工、牛や豚を飼う農夫、銀行の出納係、あるいは会社の管理者と様々である。学校の管理人、校長、または総長であることもある。また、ゴミの収集係や郵便配達夫、警察官、画家、教師、商人、退職した資本家などが、ワード部の監督に召されていることもある。

私たちの方法は世の中とは異なっている。ペテロは次のように述べている。「あなたがたは、選ばれた種族、王国の神権者、聖なる国民、特異な民である。」(1ペテロ2：9 欽

定訳より和訳)

したがって、正規の教育を受けていない監督もいれば、高等教育を受け、専門技術を身に付けた監督もいる。しかし、いずれも神の導きに信頼を置いており、その謙遜、勤勉、愛、献身の度合に応じて成功を勝ち得ることができるのである。

私はワード部の重大な問題に取り組む監督をたびたび見てきた。そして、これらの年若い監督が会員の複雑な問題を解決するために、すぐれた知恵と靈感と判断力を使っていることに驚嘆した。

この若い監督たちが皆完全な人間であり、完全な監督であると言うのは、いささか非現実的であり、真実だとは言えない。彼らも、他の人と同様に欲求や弱点のある生身の人間である。デビッド・O・マッケイ大管長のような人格や、ジョージ・アルバート・スミス大管長のような優しさはまだ具わっていないかもしれない。しかし、この半世紀以上の間に、私は数千人の若い監督と知り合い、彼らの権能、力、威厳、徳、能力に驚かされてきた。時には、管理方法が不適切で、期待された通りの力を発揮できずに解任される監督もいる。しかし、このような例はまれである。大多数の監督が素晴らしい働きをしている。これらの人々が権威の衣を着て立ち上がった時、それに匹敵する際立った集団はほかに見いだせない私は思う。

『わが道は、あなたがたの道とは異なっている』と、主は言われる。監督は必ずしもすべての分野の教育を受けている必要はない。なぜなら、すべての知識の源と接する権利を持っているからである。この啓示は予言者だ

けでなく、すべてのふさわしい義人に与えられるものであり、人は各々の管轄する範囲内で神から導きを受ける権利を授けられているからである。家長は家族と自分自身のために、監督はワード部のために、ステーキ部長はステーキ部のために、それぞれ啓示を受けることができる。

創造主に心を向ける監督は、この知識と知恵の無限の貯蔵庫からそれを引き出すことができる。しかし自分の知識や経験だけに頼るならば、失敗するであろう。靈感の源である御方は、偉大な医者、精神病医、心理学者でもあられる。したがって監督は、謙遜になって自分のなすべきことを行なうならば、決して迷うようなことはないのである。

このような特殊な分野の訓練を監督に施し、監督が直面する社会問題をもっと効果的に処理できるようにした方がよいのではないかという議論が、一部の教会員の間で何度も交わされてきた。しかし、それはいまだに実施されていない。その訳は、主に心を向ける監督は、いと高きところより主の助けを得ることができるからである。結局、この問題をカルテに書いてみると次のようになる。

病名：精神的ならびに肉体的な罪

治療対象：克己心

治療機関：教会

治療薬：福音

処方：積極的に活動に参加していつも善き業を行なう。そうすれば、悪い思いを抱いたり、行なったりする時間はなくなる。」

以上が、私の指針とするキンボール大管長の言葉です。監督は、担当ワード部の地域に住む人々を統轄する管理大祭司として、主が

望んでおられる場所で召されています。

それでは、ソーシャルワーカーや心理学者、精神病医、その他のカウンセラーについてはどうでしょうか。

キンボール大管長は同じ説教の中で、「教会は、必要に応じて訓練を受けた人（精神治療の専門家）の援助を受けるようにしている」と述べています。専門的な訓練を受けたスペシャリストの助けを求める最適な場が、教会の組織の中にあります。それは「末日聖徒社会福祉機関」と呼ばれています。そこでは、忠実な末日聖徒が専門職員として働いています。また、奉仕で働く人もいます。彼らは監督の必要に応じて援助の手を差し伸べることができるように備えをしています。

重大なことは、何が必要かを判断することです。私自身の経験から強く感じるのですが、真の問題解決は、イエス・キリストの福音に従って生活しない限り得られません。その一方で、多くの人々が精神の障害に悩まされ、両親や配偶者から極めてひどい扱いを受け、犯罪に陥り、精神的な病の虜になっていることも事実です。そこで、そのような人々の生活を安定させ、教会の原則や援助プログラム、さらにはイエス・キリストの福音の恩恵に浴びることができるように援助を与えることが必要なわけです。つまり、監督の管理の下で、監督と専門家が協力することが必要とされるのです。

私は、監督の下で協力を惜しまない専門家は貴重な助けになると思います。と同時に、とても心配な点がふたつあります。

第一に、専門家にその責任までも譲ってしまう謙遜な監督が大変多いことです。監督が

会員たちと面接する責任をすべて専門家にゆだねるならば、それが末日聖徒社会福祉機関または他の組織であっても、その監督は主から与えられた責任を放棄することになります。

第二に、専門家自身の問題です。悲しいことに、教会に活発な会員の中にさえ、自分は監督以上に知識があると思込んでいる人が大勢います。また、教会のある教義や活動において、自分は一目置かれていると思っているような専門家もいます。このようなカウンセラーは避けるようにすべきです。信頼するに足りません。神権の権威と権能を認めて尊ぶ人だけが、監督を助けて働くにふさわしいという信頼を得るのです。

教会員の中には、立派な働きをしているソーシャルワーカーや心理学者、精神病医、カウンセラーがいます。彼らは皆、優れた専門技術を持っているだけでなく、教会に忠実であり、現代の精神医療問題に謙遜に立ち向かっている人々です。このような人こそ、監督の援助者としてふさわしい人々です。

最後に一言申し上げておきます。有能なカウンセラーはよく知っていることですが、人は自由意志を行使してこそ変わります。私たちは、監督あるいは専門家に相談し助けを求めますが、しかしなお、自分を変え、進歩させるのは本人の責任です。だれかほかの人が自分の問題を解決してくれるなどと期待してはなりません。適切な知恵や勧告や導きを求めることはできますが、行ないを正し、人生のたどるべき道を定める力は、自分の中にしか存在しないのです。幸福で満ち足りた生活を送るのに、救い主との個人的な関係を築くことが極めて重要なのはこのためです。



ちい とも
 小さなお友だちへ



アウブーの シャツ

おはなし：セレサ・ブラウン

こ
 れは、アフリカのウガンダという
 くにすんでいる、アウブーという
 おとこ
 こ
 のはなし
 男の子のお話です。

アウブーは、びっこをひきひき、や



けついたあつい道を、はだしでもう一時間いじょうも歩いていました。心がしずんで、もう歩くのがいやでした。アウブーは、バナナの木かげに入って、ほっとためいきをつきました。少し遠くの、わらぶきやねの家の前に、お母さんが見えました。お母さんはなにかをやいていました。近づいていくと、お母さんのたのしそうな歌声が聞こえました。

アウブーのすがたを見ると、お母さんはいいました。「はやくいらっしゃい、さかながやけていますよ。」

アウブーは、手と足をバナナのはっぱでふきました。

その日の朝、アウブーははじめて学校に行ったのです。お母さんはアウブーのかたに手をおいていました。「学校に行くときだけは、足がなあってしまうようね。」

アウブーは小さいときにヤギに足をふまれて、びっこになってしまいました。だから、ヤギのぼんも、はたけをたがやすこともできなくて、学校に行くことだけが、たのしみだったのです。

「はやくいらっしゃい、アウブー。どうしたの。」

お母さんからさかなをもらって、アウブーは、まる太の上にしかけまし

た。でも、食べられませんでした。さかなをまる太の上において、アウブーはいいました。

「ぼく、もう学校に行けないんだ。」なみだで、声がかすれました。

「どうして行けないの。先生が、かぞくから一人ずつ、学校に来なさいって、おっしゃったでしょう。」

「うん。でも、シャツをきないで学校に来ちゃいけないんだって。」

「そう。」お母さんも顔をくもらせました。「シャツをつくるぬのも、お金もないし、しかたがないねえ。」

「すずしくなったら、イモをほりに行くよ。もう、本なんかいらぬや。」

アウブーは、くやしくて、なにかをこわしたくなって、そばにあったかごをけとばしました。中に入っていたものが、ゆかにちらばりました。すると、どうでしょう。やわらかいぬのようなものがあるではありませんか。ひろいあげようとすると、かたいものが手にさわりました。木づちがつつんであったのです。見おぼえのある木づちでした。

「おじいちゃんの木づちだ。」アウブーは心の中できげびました。

ずっと前に、おじいちゃんはこの木づちで、なんどもなんども木のかわを

たたいて、ぬのを^{つく}作っていたのです。

「お母さん、お母さん」アウブーは^{かあ}お母さん、^{かあ}お母さん」アウブーは^{おおこえ}大声でさげびました。「おじいちゃんは、この木^きづちでぬのを^{つく}作ったことがあるでしょう。」

お母さんは、アウブーがもっているぬのを^み見ました。そしていました。「そうだよ、アウブー。イチジクの木^きのかわをたたいてね。」

「そうだ！イチジクの木^きのかわだ。へいのところにあるイチジクの木^きだ。」

アウブーは走^{はし}って行って、木^きを見ました。「お母さん、^み見て。おじいちゃんが、かわをは^いだあとがのこっているよ。」

お母さんは^{かあ}いいました。「さあ、^{うえ}上のほうのかたいかわをは^ぎとりましょう。中^{なか}のやわらかいのが、ぬのになるのよ。でも、かわをたたくのはたいへんよ。」

「だいじょうぶ。うではじしんがあるもの。さあ、やろうよ。」

アウブーは^{かあ}お母さんといっしょに、やわらかいかわをは^ぎはじめました。はぎとったかわは、^{いえ}家の^{まえ}前の^たまる^た太^たの上^{うえ}にならべました。

「さて」とお母さんが^{かあ}いいました。「このかわを^き木^きづちで、なんかいもたたくのよ。わたしはイチジクの木^きに、バナナのは^きっぱでほうたいをしてやり

ましょう。そうして、どろをぬっておくと、木^きがもとどおりになるのよ。」

アウブーは、まる^た太^たの上^{うえ}の木^きのかわを、^{いっしょう}一生けんめいたたきました。たのしくな^きって、木^きづちの^{おと}音^ねにあわ^{うた}せて歌^{うた}いました。

まる^た太^たはかたいよトーン
木^きのかわのせてトーン
ちょうしをつけてトーン
つよい、いいぬのできとくれ
木^きのかわは、だんだんたいらに、そして^{おお}大き^{おほ}くなってきました。

「もう、いいでしょう。」^ひ日がくれはじめたころ、^{かあ}お母さんが^{かあ}いいました。「あしたになったら、ふたりでひ^{おほ}っぱって大き^{おほ}くしましよ。そうしたら、シャツ^{つく}が^{つく}作れるわ。むかし、しゅう^{ちゅう}長^{ちよう}がきていたようなシャツがね。」

「ほんとう？」

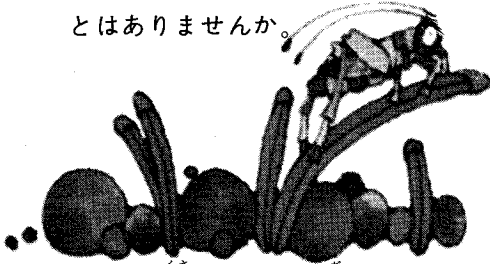
「ほんとうよ。むかしはね、シャツはしゅう^{ちゅう}長^{ちよう}しかきられなかったのよ。」
アウブーは、木^きのかわのぬのを、たいせつにまくらもとにおきました。

そしてこうかたりかけました。「シャツになったら、せなかにチーター^{まへ}をかいてあげるよ。そして、お前^{まえ}をきて、^{いちばん}一番^{がっこう}はやく^い学校^いに行くんだ。」

なんでもしつもん教室

ケイ・エル・ハーベイ

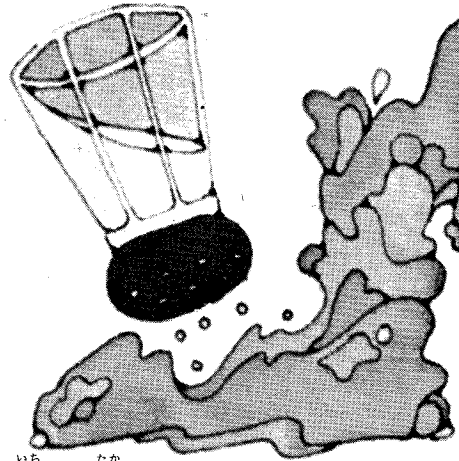
こんなことを知りたいと思ったことはありますか。



1 どうして草は、かたい地めんからでもはえてくるのだろう。それは、はっぱの先にかたいところがあって、道を作りながら、土をおしわけて、出て来る力をもっているからです。

2 人間は、どのくらい遠くまで見えるのだろう。たいていの人間は、光がとどくくらい遠くまで見ることが出来ます。人間に見える一ばん遠くにある星は、何百まんキロメートルも遠くにあります。

3 海にはどのくらいのしおがあるだろう。海のしおを地上につみあげたしたら、南アフリカという国ぜんぶを、1,000メートルのふかさにうめてしまうことができます。おもさは、何ちよトンにもなります。



4 一ばん高いなみは、どのくらいの高さになるのだろう。アフリカの一ばん南にある「きぼうほう」では、12メートルくらい、北海では60メートルにもなるそうです。

5 どうして、電気にふれるとビリビリするのだろう。それは、電気にふれると、きんにくが、ちぢむからです。

6 どうして、川のながれは、きしの方よりも、まん中の方はいののだろう。それは、きしの方は、石や土のまさうがあって、川のながれをおそくするからです。同じように、川のそこよりも、上の方が、ながれがはやくなっています。



7 なぜ、ダチョウはクギを見つけたら、のみこむのだろう。ダチョウは、クギをのみこんでしまうことがあります。それがおいしいからではありません。ダチョウは、歯がないので、かたいものをすりつぶすために、何かをひつようなのです。それでクギをのみむのです。たいていの鳥は、すなや小石をのみこみます。



8 シンデレラのくつは、ほんとにガラスだったのかしら。いいえ、ガラスではなくて、毛がわでした。フランス語の、まだらりすの毛がわということばと、えい語のガラスということばが、にっていたので、ガラスということになってしまったのです。むかし、毛がわは、みぶんの高い人がきるものでした。それで、シンデレラも、おしろに行くときには、毛がわのくつをはいて行ったのでしょ。

9 一人の人に、何人ぐらいの先ぞがいるのだろう。だれにもお父さんとお母さんがいるし、お父さんにもお母さんにもそれぞれお父さんとお母さんがいます。だから、350年ぐらいさかのぼると、一人の人に8,000人も先ぞがいることになります。



10 こう山をほる人は、どうしてカナリヤをもって、あなの中に行くのだろう。カナリヤのちは人間のちよりもはやく体の中をめぐるので、ゆうどくガスが出てくると、カナリヤは人間よりもはやく死にます。だから、カナリヤのようすを見て、手おくれにならないうちに、外に出ることができるのです。



友情

ドロシー・レオン



イシメルのお父さんは、らくだ売りで、ベンジャメルのお父さんは、羊飼いでした。ふたりは、大のなかよしでした。毎日、仕事の後で、ふたりはゲームをしたり、おとなになってから何をしたいかについて話しあったりしました。

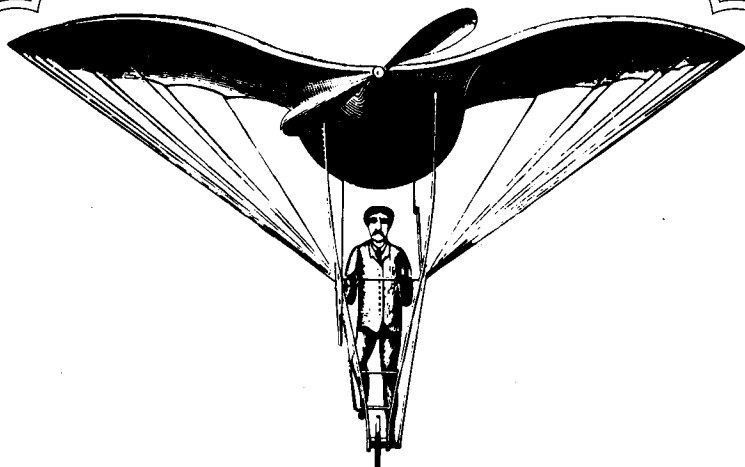
「ぼくは、いつか遠い国へ行くんだ。そして、王様や女王様にお会いするん

だ。」イシメルはいいました。「ぼくはこの先祖の地において、子どもたちとくらすんだ。」ベンジャメルはいいました。

「じゃあ、ぼくもここにいることにしよう。遠くに行ったら、ちかい（かたい約束のこと）を守れないからね」イシメルはいいました。そこで、ベンジャメルは、「じゃあ、もう一度、ちかいを立てなおそうよ。ぼくたちの友情

り、もどつて来ますから」といつて司令官にたのみました。司令官は、わらいなから「おれをばかにする氣か。おまえがもどつて来るというしうしうこが、どこにあるというのだ」といきました。「私が彼のかわりになります。彼のかわりに私を殺してください。彼を帰しやうてください。」おまえかだと。おまえは、この部隊の隊長で一番しんらいのおけるやつだ。おまえは、このスライのために、自分のいのちを捨てるといふのか。司令官は、たずねました。「彼のかわりに私を殺してください。」おまえは、きつぱりといまします。「どうしてだ。なぜおまえは、この男のために、自分のいのちを捨てるというのだ。」司令官は、聞きました。「友情としんらいのためです。」イシメルは答えました。司令官は、ベシヤメルとイシメルとを見くらべると、ひとりごつたようにつぶやきました。「ほお、友情としんらいねえ。」司令官は、しばらくの間、だまつていましたが、やがて、イシメルの方をふり返つていきました。「この男をゆるしてやう。ただし、このおれを、おまえたちの仲間に入れてくれるならばな。」

た。
 やがて、ふたりはせいちようして、おとなになりました。ふたりの友情は、年とともに強くなりました。ふたりは、よろこびや悲しみを分けあいました。らくたや羊がこどもを産んだときには、助けあいました。しかし、とても悲しいことが起こりました。戦争のために、ふたりは、はなればなれになってしまつたのです。ベシヤメルと家族は追われて、別の地に行つてしまいました。イシメルと家族は、この地に残りました。戦争が起るとすぐに、イシメルはちようへい(兵隊に出されること)され、まもなく、隊長になりました。2つの国のれんらくは禁止されていまして、ベシヤメルとイシメルは、ひたつた方法によつて、れんらくしあつていました。
 ある夜、イシメルをたずねて来たベシヤメルは、とらえられて、ろうやに入れられ、死刑をいわたされました。イシメルは、友だちのいのちを助けたくれるように、司令官にたのみました。しかし、むだでした。ベシヤメルも「家族に別れをいたないので、一週間だけまつてください。約束とお



悪条件の中を飛ぶ

七十人第一定員会会員

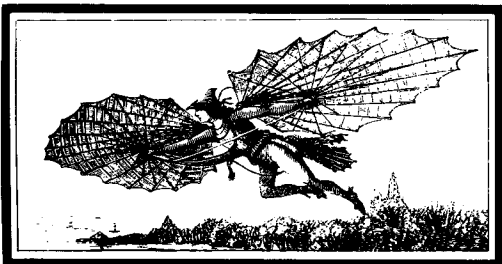
ロバート・E・ウエルズ

私はこの30年間、合衆国や中南米の空をいろいろな機種で飛行機で飛び回ってきた。つい最近、何年ぶりかで合衆国に帰ってくると、親友のひとりが買ったばかりの双発セスナ機に乗ってみるようにと勧めてくれた。それがまた私の好きなタイプの飛行機で、強力なターボエンジンを搭載し、高い空でも平気で飛行できる上に、通信装置や電子操縦補助装置、自動無線レーダー、距離測定装置、全天候飛行用の計器、酸素ボンベなど、まさに旅客機並みの装備を備えていた。実にこれ以上に快適な飛行機はないであろうと思われる

ほどだった。しかし、これほど精巧で高価な装備を持つ飛行機であるにもかかわらず、どうしてもためらってしまい、「そうですね、いつかメキシコへ御一緒したいですね」と言っただけで断わってきた。それから1、2カ月の間、友人は私に会うたびに飛行機を使わないかと勧めてくれた。けれども、真心からの申し出であると知りながら、どうしてもその気になれなかった。そんなある日、友人は鍵束と操縦士のハンドブックを持って私の事務室を訪ねてきた。美しい自家用機を私に使ってほしいことは明らかだった。鍵束を手にした

私は、心の中にメキシコへ飛んでいつもの場所まで海釣りをしたいという気持ちがむくむくと湧き上がってきた。残念なことに、その友人とは日取りが合わず、私ひとりで行かなければならなくなった。そこで私は、彼の保険が私にも適用できるかどうか尋ねた。すると、私がこの種の飛行機に乗ったのはかなり以前だということで、資格ある検査官とテスト飛行をしなければならないことがわかった。

手続きを済ませた私は、約束の時間に飛行場で検査官と会った。私は合衆国、アルゼンチン、パラグアイ、エクアドルの飛行機免許証と、セスナ 310 でジャングルや山や砂漠や国境などを飛ぶ時の記録を書く航空日誌を手を持って乗り込んだ。検査官は穏やかな笑い



を浮かべ、そして事務的な口調でこう言った。「あなたについてはよく伺っています。飛行経験も十分おありのようですが、それはすべてが順調にいった場合のフライトだと考え、これから、悪条件の下でどれだけできるかを見せていただきます。」

それからしばらくの間、思いつく悪条件を想定してスイッチを入れている箇所はみな切り、スイッチを切っておくべき箇所は入れ、まったくのパニック状態を引き起こそうとした。このような最悪の状況の中で私がどれだ

け飛べるかを見ようとしたのである。テスト飛行を終え地上に降り立った彼は、私の航空日誌にサインをして、「大丈夫です。私の妻や子供でも安心してお願いできますよ」と言った。私はこれ以上はないと思えるようなおほめの言葉を受けたのである。

人生の目的のひとつに、私たちが主にどれだけ奉仕するかを試され、それを証明するということがある。予言者ジョセフ・スミスは、私たちがいかなる艱難の中にあっても主に忠実に奉仕できるかどうかを試される時があると語っている。私たちは前世で、行く手には私たちが試す数多くの逆境が待ち受けていることを知っていた。事故、病気、誘惑、悩み、失望、落胆、災難、失敗、これらはすべて私たちを試し、私たちの人格を形成するものとなることを知っていた。

何年も問題がなく過ごしてきたのに、突然大きな不幸に見舞われ、担いがたいほどの重みを感じることもあるだろう。しかし、そのような苦難の中にあっても、私たちにふたつの確かな振り所がある。(1). 私たちは地上に来る前からこのような状態を予想しながら、それでも終わりまで忠実であった時の祝福が永遠の昇栄であることを知ってこの世に来ることを望んだ。(2). 耐えられないような試練は決して与えられない。

事故や病気、失意、落胆、不幸、失敗、誘惑や災難は確かに試しであり、私たちはそれに備えなければならない。しかし、普通に試しとは考えずに、見落としていることもある。そのひとつが財産である。財産を得ると霊的であることが以前より難しくなる。自分の釣り船を持つと安息日を破りたくなるし、保養地に別荘を持てば自分のワード部で責任を果



たすことが難しくなる。財産は試しの手段でもある。私たちは富を上手に用いて靈性を保つことができるであろうか。

また、自分の才能は賢明に使っているだろうか。才能に恵まれ、ナイトクラブや劇場や舞台など、一般の末日聖徒としての生活がしにくい職業に就いた時でも、私たちは靈性を保てるであろうか。才能は育み、用いなければならない。要は、「芸術界、芸能界に入っても堕落せずにいられるだけの強さを持っているだろうか」ということである。

時折、夫婦の間の何とはない意見の相違や教養の違い、優先順位の違いなどに乗じて、サタンは「あなたは今幸せか？ほかの人の方がもっと幸せになれるのではないか？人生で最も大切なのは幸福というものではないか？」と疑問を投げかける。このような疑問は

あらゆる偽りの父であるサタンから来るものである。私たちは一時的に「幸せ」を疑うことがあったとしても、何よりもまず自分の永遠の伴侶に誠実であるという試しを乗り越える決意をしなければならない。

ごく普通の子供を持つ普通の親たちの多くが、一緒に昇栄するという目標を見失い、様々な状況の中で受ける靈的な試しに失敗している。一方で十代の若者たちの自立を許しながらも、他方では親が極端なしつけを強いることによって、子供や親の一方、あるいは双方がこのような靈的な試しに失敗している。

大切なことは、あなたは、まったくの悪条件の中でどれだけ上手に飛べるだろうかということである。あなたの信仰を試す様々な苦難に遭遇する時に、あなたはどれほどそれに耐えられるかということなのである。

オリンパス号による大西洋横断

ウィリアム・ハートレー



美しい帆船オリンパス号で外国に旅立つ不安げなヨーロッパの聖徒たちに、ひとりの使徒が、この航海には苦しいことが数多くあるだろうが、無事に目的地に上陸できるであろうと予言した。

1851年3月の初めのことである。当時フランス伝道部を管理していたジョン・テイラー長老は教会の仕事でたまたま英国に滞在していて、リバプールからオリンパス号でアメリカに向かう友人（改宗者や宣教師たち）を見送りに来ていたのだった。その友人たちの中にウイリアム・ハウエルという人がいた。彼は1年前にフランスで福音伝道の門戸を開き、今は245名の聖徒たちを約束の地に旅立たせる責任を受けていた。テイラー長老は、245名の聖徒が無事に目的地に着けることを願い、次のような予言的な警告を与えた。オリンパス号は嵐に遭い、聖徒たちは悪霊や病に苦しめられるだろう。しかし「神はあらゆる危険から聖徒たちを守り、無事に港まで導いて下さるであろう」と。

海が穏やかであれば、ニューオーリンズまで5週間である。聖徒たちは希望に胸をふくらませ、3月4日にここを出航すれば4月中旬にはアメリカに着き、恐ろしいコレラが大流行する春から夏を避けてミシシッピ川を上ることができると考えていた。今回は1850—51年の移民期に行なわれた7回目の航海であり、その後は翌年の1月まで出帆の予定はなかった。ウイルソン船長は経験豊かな船乗りであり、オリンパス号と乗組員、聖徒の一団、それに60名近い教会員ではない乗客をあずかっていた。

テイラー長老が予言したように、船出しても浅いある夜、突如として苦難が襲ってきた。船室には、400名近い人々が、「長さ27メートル、幅7メートルにわたって作られた寝

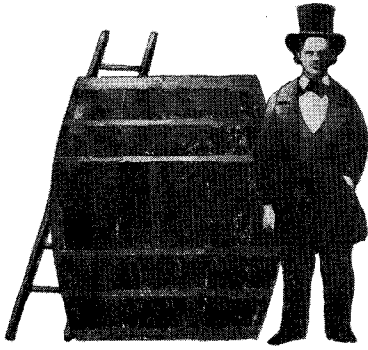
台に、窮屈そうに休んでいた。「夜半すぎ」突然、13歳の男の子が興奮して寝台から飛び起き、かん高い声で何度も何度もある乗客の名前を叫んだ。その子の両親や兄や姉が静めようとしたが、むだであった。乗客のウイルソン・ノーウェアズ兄弟は「この子は悪霊に取りつかれている」と言った。そして神権の力によって、この悪霊は追い出された。

テイラー長老のもうひとつの予言が成就したのも、それから間もなくのことだった。オリンパス号は恐ろしい向かい風にあおられた巨大な波が日夜船体めがけて打ち寄せてくる恐怖のアイルランド海に突入した。3週間にわたって、船は波の上をもてあそばれ、多くの者が酔い倒るために「言いようのない悲惨な思いをした。」そしてやっとのことで待ちに待った穏やかな日が訪れた時、乗客たちは皆心からこれで航海の峠もどうにか通り越したと喜んでた。しかし、ウイルソン船長の鍛えぬかれた眼は、水平線のかなたに急に現われた一点の雲を見逃さなかった。はじめ帽子ほどの大きさしかなかったその雲は、みるみるうちに空一面に広がってきた。

船長は即刻、乗組員を甲板に集め、すべての帆を降ろすように命じた。彼はノーウェアズ兄弟と、英国のドーバーから来た20歳の青年大工エドモンド・フラーに、甲板に残って、乗組員の手伝いをしてくれるよう頼んだ。（この航海の後、フラー青年はモルモンの女性アデレイド・ジェリーと恋をし、教会員となって、ミズーリ州セント・ルイスで結婚している）

帆は降ろされ、しばりつけられた。乗客は皆船室に入った。再び嵐の到来である。

オリンパス号はものすごい力で揺さぶられ、まるで「酔っぱらいのように」よろめいた。あまりに激しい風のため前のマストが折れ、海の中に飛んで行った。数人の者が船べりの



ところで折れたマストを切り落とそうとしていてすんでのところマストと一緒に海に投げ出されそうになった。激しい風と雨でメインマストは甲板の上に裂けて落ちた。

オリンパス号は自力ではどうすることもできなくなっていた。夜になっても嵐は止まず、船は容赦なく吹きつける強風に打ちつけられ、前進することもできなくなっていた。船のあちこちに亀裂ができ、そこから水が船内に流れ込んできた。

嵐になって2時間後の午後8時頃には、水が船倉に1.2メートルもたまり、ポンプで水をくみ出さなければならなくなった。甲板の上ではひざよりも高く水が流れており、ノーウェアズ兄弟とフラー青年は海に投げ出されないよう体をポンプに縛りつけて作業をしていた。海は相変わらず荒れ狂っていた。オリンパス号には水がたまる一方だった。

夜半になっても嵐はおさまる気配を見せない。甲板の船長をはじめ乗組員たちは絶望的になっていた。そんな時ノーウェアズ兄弟の耳に、船長が二等航海士のハミルトンに向かって、船内にいるモルモンのハウエル長老に、「モルモンの神に、この船と乗客を救えるならば、是非救って下さるよう願ってほしい」と伝えるよう命じている声が入ってきた。船長は、乗組員の必死の努力にもかかわらず、

オリンパス号が1時間に30センチの割合で沈んでおり、このままでは朝には海の底に沈んでしまうと云った。

二等航海士は、ノーウェアズ兄弟と同行を求めた。ふたりは波の具合を見計らって、甲板昇降口の扉を開けて船室に下りていった。そして寝台の上にはいたハウエル長老に、船長の願いを伝えたのである。

モルモンの指導者は穏やかな口調で答えた。「ウイルソン船長に伝えて下さい。私たちは海の底に沈むことはありません。私たちはリバプールからルイジアナ州のニューオーリンズまで航海していくのです。無事にその港に着くはずで。神が私たちを守って下さるでしょう。」ハミルトンは甲板にもどり、ウイルソン船長にモルモンの指導者の返事を伝えた。

ノーウェアズ兄弟はずぶぬれの体で甲板の下の混乱の様子を見て、ただぼう然としていた。船体が前後左右に揺れるたびに、置き場所の定まらないトランクや小荷物が、船の一方の側から他の側にごろごろと転がっていた。乗客の中には悲鳴を上げる者、祈る者、ただじっと嵐の鎮まるのを待つ者など様々である。

ハウエル長老はすぐに立ち上がると、服装を整え、12人の兄弟たちを集めた。その中には改宗したばかりのウイルソン・ノーウェアズ兄弟もいた。指導者は、ここに集まった者が順番に声を出して、この船を救って下さるよう主に祈ることを告げた。そしてハウエル長老が最後に祈った。

「彼が祈っている間、私は船の動きに大きな変化があったのを感じた」とノーウェアズ兄弟は語る。これまで前後左右に大きく揺れていたオリンパス号は「まるで厳しい寒さに震えているような」小さな揺れに変わってきた。彼には船が沈んでいるとはどうしても思えなかったし、そうかと言って嵐が急に鎮ま

ったとも思えなかった。

最後に心から「アーメン」と唱えると、ハウェル長老は兄弟たちに寝台にもどるように告げた。ノーウェアズ兄弟は、ポンプの仕事につくために甲板にもどった。するどどうだろう。「あの嵐がおさまっていたのである。信じられないことだった。風は止み、波は船のまわりで穏やかな音をたてていた。しかし遠くの方ではまだ巨大な波のうねりが聞こえていた。」祈りの間オリンパス号の揺れが小さくなったのは、このためだったのである。

排水作業は朝まで続けられた。そして安息日の朝を迎え、空はきれいに晴れわたっていた。ウイルソン船長は、モルモンの指導者にすがる前に自分にできるすべてのことをした後、神のみ手によってこの船が救われたことを知っていた。

船員たちが壊れたマストを取りはずして、応急マストの準備をしていると、乗客たちが甲板にどっと出てきた。そして、聖徒たちも教会員でない人も皆一緒になって感謝の祈りを捧げた。乗客はこざっぱりとした服に着替え、リバプールを発って初めてひげをそり、皆晴れ晴れとした顔をしていた。聖徒たちはウイルソン船長の許可を得て、安息日の礼拝行事を行なった。

3月23日のその日、説教を聞き、讃美歌を歌った後、バプテスマ会が開かれた。3週間の航海の間、大勢の乗客が改宗し、バプテスマを望んだのである。船長は甲板に大きなたるを用意し、ふたを取り、その中に入りやすいように短いはしごを据えた。そして、それに海水を腰の深さほど入れた。この時、21名の男女がバプテスマの水に入った。その翌日に、改宗者たちは確認の儀式を受けた。聖餐式が執行され、病人の祝福も行なわれた。

航海中の聖徒たちの模範的な行ないは、他の人々に良い影響を与えた。その結果、午前10時と午後9時の祈り会と定例集会には教会

員以外の人々も参加した。そこでは毎回、5、6人の兄弟たちの短い説教が行なわれた。彼らは、その集会在予言の力や異言を語る力、病を癒す力などのみたまの賜に満ちたものであったことを証している。彼らはまた子供を連れてモルモンの勉強会に参加したり、夕べの講演で長老たちの宗教以外の様々な話題にも耳を傾けたりした。このような聖徒たちの努力が、大勢の改宗者を生んだのである。

第2回のバプテスマ会では、20名の男子が海の中でバプテスマを受けた。船の昇降口のふたをロープに結んで海面に下ろし、浮き台を作った。

スミス副会長とほかの数人が安全ロープを体に巻いてその上に立った。バプテスマを受ける者は体に安全ロープを巻き、腰にがんじょうなベルトをしめて、ひとりずつなわばしごを伝って台の上を下りた。そして、儀式を施す長老の左側に立った。長老は右手で腰のベルトを、左手で上着のえり首をしっかりとつかんだ。改宗者の手は長老の手首をつかんでいる。それから、彼を「海中に浸し、引き上げた。」

こうして、4月の末、オリンパス号がルイジアナ州ニューオーリンズに到着し、ミズーリ州セントルイス行きの蒸気船アトランティック号に乗るまでに、50名の乗客が改宗してバプテスマを受けた。

セントルイスで一行は分かれ、ある者はそこで仕事を捜し、ある者はアイオワ州ケネスビル行きの蒸気船ステイツマンに乗り、それからまた13日間も旅を続けた。ケネスビルでは150台もの末日聖徒の荷車が、1851年の最初の西部行きのために用意されていた。こうして平原横断の旅に発った人々の中に、彼らが乗ったステイツマン号の料理人と船荷係がいた。彼らも末日聖徒の模範に感銘を受け、ユタの末日聖徒の社会の一員となる志を立てたのであった。

出ノーヴー

1844—47年

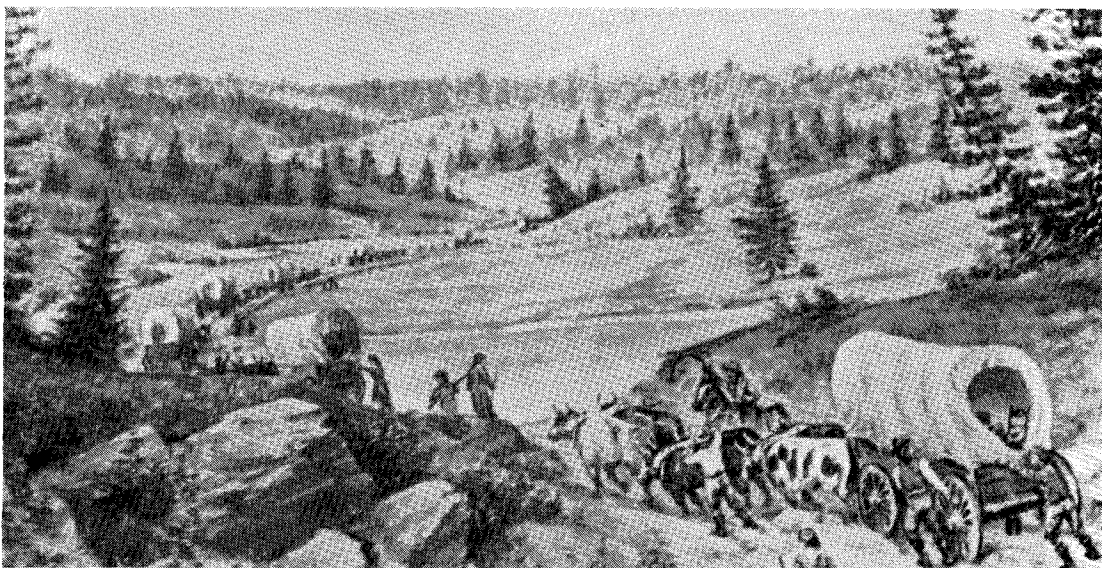
グレン・M・レオナード

1840年代後期、イリノイ州ノーヴーからグレート・ソルトレーク盆地へ向けて、約1万の末日聖徒が移住したことは、モルモン教会史上最大の出来事のひとつである。1847年、ソルトレーク・シティが新たに教会の中心地になると、この西行の旅の一团に合衆国の方々の地域からの教会員ならびにヨーロッパからの数千の改宗者たちが加わった。彼らはこの西部における新しいシオンの地への集合を願ったのである。

1847年に開拓者たちが未開の平原を越え、ロッキー山中の安住の地を求めて進んだ道は、「モルモンの道」として知られるようになった。後にこの道をおよそ8万の末日聖徒が幌馬車隊や手車隊を組んでたどることになる。移住も大陸横断鉄道が完成した1869年以後、容易になってきた。しかし、19世紀末になると、教会指導者はその移住を思いとどまらせ、それぞれ各地にとどまって教会を建設するこ

との必要性を強調し始めた。そして、世界各地のワード部、ステーキ部が新しい「集合の地」になると言われた。

ジョセフ・スミスはすでに1842年からロッキー山中への移住を計画していた。当初の計画では、ノーヴーをそのままにしておいて、西部の盆地にステーキ部を立て、やがてオレゴン州やテキサス州にもステーキ部を築くつもりであった。しかし自分の命が脅やかされ、聖徒たちが苦しめられるに至って、この構想は再考を余儀なくされた。1844年、予言者がカーセージの牢獄で殺されると、敵の中には教会は分裂し、教会員も散り散りになってしまいうだろうと考えた者が大勢いた。彼らは教会員一人一人の強い証が、ジョセフ・スミスではなく、偉大な大義の上に築かれていたことを見逃していたのである。また、ジョセフ・スミスの方針を断固として推進する十二使徒会会長、ブリガム・ヤングの不拔の指導力を



知る者もいなかった。

そのブリガム・ヤングの大管長就任に、まず異議を唱えたのはシドニー・リグドンであった。リグドンは1833年以来大管長会の第一副管長として予言者と数多くの霊的経験を共にしてきた。しかし1843年10月、ジョセフ・スミスはみ業に対するリグドンの怠惰と対立を感じ取り、彼の解任を望んだ。しかし総大会で他の人々は彼を支持し、予言者の反対にもかかわらず、リグドンは疑惑を残したまま副管長の地位にとどまった。ジョセフ・スミスの殉教後、使徒たちは教会の指導者を決めるためにノーヴーに集合した。その席でリグドン副管長は自分が大管長になるはずであると全員の支持を求めた。

8月7日、この不実の副管長は十二使徒会と地元の神権指導者に自分の申し出を述べた。翌日、多数の聖徒たちが野外集会に参加して討議の成り行きに耳を傾けた。リグドン副管

長は、ジョセフ・スミスの副管長こそが継承者であると訴えた。「ジョセフの代弁者」となることを欲したのである。ブリガム・ヤングは会衆に向かって教会政体の本質を説明し、十二使徒会のみが新しい大管長を聖任する権威を持つと述べた。それまで数年間に、十二使徒会の働きは教会全体の責任まで及ぶようになり、1835年に与えられた大管長会と同等の権威を十二使徒にも授けるという神権に関する啓示もすでに実施されていた。(教義と聖約107：23—24参照)

ヤング大管長やその他の人々が説教をし、丸一日に及ぶ特別大会を終えると、会衆は、十二使徒会が大管長会の責務を代行することを支持した。それから3年後の1847年12月、十二使徒会は管理定員会を再組織し、ブリガム・ヤングを大管長に、そしてヒーバー・C・キンボールとウイラード・リチャーズを副管長に選んだ。1877年のブリガム・ヤング大管

長の死後3年間、およびその10年後にジョン・テイラー大管長が死去してからの約2年間は、十二使徒会が大管長会と同等の機能を果たしたこともあった。しかしその後は、自分の死後直ちに大管長会を組織するようというウィルフォード・ウッドラフ大管長の勧告もあって、大管長の聖任は直ちに行なわれるようになった。

シドニー・リグドンは1844年8月の大会における決定を快く受け入れたように思われたが、それも長続きはしなかった。しばらくして自ら十二使徒をしのぐ権威を持つと主張し始め、ノーヴーを去って、ペンシルベニア州で自分の教会を設立した。そして、数名の不满分子と共に破門されたのである。

教会初期の時代に大管長の名乗りを上げたもうひとりが、ジェームズ・J・ストラングである。改宗してわずか4カ月のストラングは、ジョセフ・スミスが殉教する数週間前に自分を次期大管長として聖任したと主張した。彼は、予言者が書いたという証拠の手紙を所持していた。しかし、十二使徒会はそれを偽造と断定した。このことは以後の史料調査によってもはっきりと裏付けられている。しかしストラングは主張を譲らず、少数の追従者を集め、ミシガン湖のビーバー島に入植し、自ら王となった。彼は、1856年、部下のひとりに暗殺されるまでその入植地を支配した。また、ライマン・ワイト長老も、ブリガム・ヤングの勧告に挑戦するかのように一団を引き連れ、テキサス州に移り住んだ。

ヤング大管長は結局は聖徒たちをノーヴーから移すようになることを知っていながら、神殿が完成するまではとどまるようにと聖徒たちを励ました。その甲斐あって、続く1年半の間に聖徒たちの力は燃えあがり、衣食を労働者に提供し、時間を捧げてこの荘重な建物の建設に貢献した。聖徒たちはジョセフ・スミスが約束した神殿の祝福を得たいと心か

ら願っていた。ヤング大管長と十二使徒会は、神殿委員会や建築技師のウィリアム・ウィークスとたびたび会合して建築を急がせた。1845年の晩春、ついに笠石が置かれた。そして翌年の4月の総大会までに完成する予定であった。

ところが、この工事の最中に、再びノーヴーを緊迫した空気に包み込む出来事が起こった。かの殉教を引き起こした時の緊張が聖徒たちの間に走った。ヤング大管長は聖徒たちに、政治問題には関与しないように勧告した。教会に対する敵意が生じるのを防ぎたかったからである。しかし時すでに遅く、ノーヴーの政治勢力と対立する人々が州議会にノーヴー憲章の撤回を求めて押しかけていた。この重要問題は長い間の論争になり、やがて1845年1月の議決により、このモルモン教徒の町は一時無政府状態となってしまった。そこで、ノーヴーの責任者たちはすぐに志願兵を募り、治安の維持を確保しようとした。十二使徒会はイリノイ州のフォード知事に応援を依頼し、知事の指示を受けて市内の2.5平方キロの区域に町政府が設けられた。この新しいノーヴー政府によって、短期間ながら安定が得られたのであった。

しかし、聖徒に敵対する人々はそれに不満を持ち、地元の対立新聞は教会員に郡の公職を与えるべきではないと論じた。これを契機に議論が沸騰し、モルモン教徒の財産に対する破壊行為が頻発した。反モルモン派の人々とそれに加担する背教者たちは方々の入植地から聖徒たちをノーヴーへ追い立て、さらには教会全体をイリノイ州から追い出すことを企てた。

こうした反対勢力の動きが活発になると、十二使徒会と50人評議会は密かに合衆国の国境を越えて脱出する計画を立てた。ノーヴーから調査隊を送り、アイオワ州西部の入植地を探らせた。また連邦政府や州政府に手紙を

書き、未開の土地で安寧を得るという十二使徒会の決定に承認を得た。

1845年9月、モルモンの敵対者はノーヴー市周辺に散在するモルモンの小さな集落に焼き打ちをかけ始めた。まったく無防備の状況で丸太小屋に放火された聖徒たちは、その地を逃れざるを得なかった。暴徒は200軒を越える家や農場、工場、それに干し草置場を焼き払った。好意的な保安官ジェイコブ・バックスの懸命な抑制も効果はなかった。

ウィルフオード・ウッドラフは自分の日記にこう記している。「私たちは広大な沃土の谷を驚嘆の思いで眺めた。ヤング大管長はこの盆地を見て、ここを聖徒たちの安住の地とすることに心からの満足を覚え、旅は十分に報われたと感じた。」

そして後年ウッドラフ長老は自分の幌馬車の上からふたりで盆地を眺め、ヤング長老が「まさにこの地だ。行こう」と語ったことを切々と語っている。

ヤング大管長は郊外を逃れてノーヴーへ疎開するように聖徒たちに勧めた。彼は報復を禁じる傍ら、同情的な住民に、財産権を踏みこむ暴徒の非道さを見て聖徒たちを支持する側に立つてほしいと訴えた。

その年の秋から初冬にかけて、ノーヴーの鍛冶屋は翌春の出ノーヴーで使う幌馬車作りに精を出した。1845年10月の総大会では、聖徒たちに移住の支度に関する指示が出された。十二使徒会は地図と西部探索の報告を調べ、また両方の旅行者に助言を求めた。出発の日が迫ってくると、安全な新しい町の候補地をワサッチ山脈の肥沃な盆地に定めた。

1846年2月4日、ブルックリン号がニューヨーク港からサンフランシスコ港に向け、5カ月の航海に出帆した。乗客は合衆国東部から集まった238人の末日聖徒であった。サミュエル・ブランンの指揮の下に、当時ユタ州も含まれていた「カリフォルニア州北部」のメキシコ領土めざす移民団の一部であった。時を同じくして、ノーヴーから、避難民がはしけで冷たいミズーリ川を渡り、起伏の多いアイオワの平原へ向けて幌馬車の旅に出発した。イリノイ州の聖徒たちは出発を3月あるいは4月以降に予定していたが、教会指導者に対する脅迫や暴徒蜂起の噂があちこちで立てきたために、出発を繰り上げたのである。5月中旬までに、1万2千人近くの聖徒が川を越えた。その中には2月の氷の張りつめたミシシッピー川を渡った者もいた。こうして近代におけるイスラエルの脱出劇の幕は切っておとされたのである。

移住が始まった後も、ノーヴー神殿の建築は続けられた。七十人評議員会の前任会長であったジョセフ・ヤング長老があとに残って、後方からの移住の支援と神殿の献堂を終える業に就いた。十二使徒会は1845年の暮れには神殿の一部を献堂し、すでに6千人近くのふさわしい教会員にエンダウメントを施していた。

4月下旬に建物の仕上げが終わると、ウィルフォード・ウッドラフ、オルソン・ハイド、ジョセフ・ヤングの各長老たちによって献堂式が行なわれた。しかしその後直ちに建物を放棄する計画が練られた。けれども、神殿を他の宗教団体に売却するという計画も実現しないまま、1848年、放火と思われる火事で木造部分が焼け、その2年後に暴風で石灰岩の壁が崩れ落ちた。聖徒たちがこの美しい市を見捨てることにして、最後の一団が市を出たのは、暴徒の襲撃によって病人やか弱い者たちまでも追い出された1846年9月のことであった。

1846年、移住者たちは続々とアイオワ州を

横切った。旅の衣食を蓄えていた者は多かったが、そうでない者はミズーリ州セントルイスや北部で仮の仕事につき、木を伐ったり、棚を造ったり、農家の手伝いをしたりして必要な蓄えをした。ブリガム・ヤングは移民団を西部の旅の慣例にならって軍隊式に編成した。各部隊は約50家族から成り、時にはそれをさらに10家族ずつに分け、それぞれに隊長を置いた。各隊長が行進から規律の監督、日用品の分配、見張りや家畜番の統率まですべてを指揮した。

1846年の春は気候も寒く雨が多くて、道はぬかった。聖徒たちは来る日も来る日も、一路ミズーリ川をめざしてアイオワ州の南部を



エコーキャニオンを通してソルトレーク盆地に入った幌馬車隊の一団。
(写真撮影、チャールズ・W・カーター、1867)

進んだ。そして定期的にキャンプを張っては休み、新しい隊を組織した。アイオワ州のガーデンローブとマウントピスガの近くでは農地を開墾し、後続の移住者たちのために小麦やその他の穀物を植えた。この歴史に残るアイオワ州の道を旅している最中に、ウィリアム・クレイトンは英国で子供時代から聞き慣れていた古い調べにのせて「恐れず来たれ聖徒」(讚美歌23番)の歌詞を書いた。妻ディアンサ出産の報を受け、母子共に健在であることを聞いて喜びの声をあげ、「恐れず来たれ聖徒、……無益な憂いは払いて努めよ、されば喜ばん、すべてはよし」と書き綴ったのである。

ブリガム・ヤングの一行は6月の半ばにミズーリ川へ到着した。ブリガム・ヤング長老は400名ほどの男子からなる選り抜きの先行隊を組織し、山を越えてその年のうちにグレートベースンに秋まき小麦を播かせたいと考えた。十二使徒会は西へのルート、物資、さらにはインディアンとの問題など、いろいろな情報の収集を行なった。そしてインディアンの仲介人とミズーリ川一帯の情勢について話し合い、カウンスル・ブラフスのインディアン所有地に残留者のための一時的な入植地を借りる許可を得た。幌馬車の渡しが始まり、人々は材木を得るために、近くのインディアンの製材所に丸木を運んだ。渡河を容易にするために、山の手から河原まで簡単な道がつけられた。

この川の西岸に、聖徒たちはウインター・クォーターズと呼ばれる野営地を建設した。現在のネブラスカ州オマハにあたる所である。そして川の東岸、後にケインズビルと呼ばれ、現在アイオワ州カウンスル・ブラフスとして知られている一帯にも無数のテントが立てられた。

しかし野営地の建設が遅れて冬が迫っていたこともあって、旅は春まで延期されることになった。

そうしたある日、はしけて幌馬車を渡していた最中に、東部からの使いが歴史的な知らせを持ってやってきた。聖徒たちは、ミズーリを追われて以来、教会の代表者はワシントンの連邦政府の援助を求めていたが、それまでモルモン教徒の問題は地方の問題であり、連邦政府の関与すべきことではないという返事しかもらえなかった。ところが、メキシコとの戦争が起こり、それが国境論争や西部の広大な領土問題にまで発展すると、問題の地域へアメリカ軍を派遣することが必要となったのである。

ワシントンD.C.にいた教会のスポークスマンであったジェームズ・C・リトル長老は、物資を軍へ運搬する契約か、オレゴンの道を通ってくる移民団をインディアンの襲撃から守るための砦を築く契約を結ぼうと働きかけていた。そしてモルモン教徒の移民を助ける資金を得ようとしたのである。ところが何と、連邦政府から、500人のモルモンの義勇兵を西部陸軍に派遣するようにとの要請がきた。この計画に従って、モルモン大隊はニューメキシコ州のサンタフェまで行軍し、スチーブン・W・カーニー大佐の支配下に入りカリフォルニア遠征に加わることとなるのである。

ヤング大管長はこの要請に積極的に応え、兵を募った。聖徒たちの中には、それが貴重な男手を奪い、家族を困らせる政府の策略だと考える者もいた。しかし結局、自分たちが軍隊に加わることが聖徒たちの移住を助けることになることと説得された、モルモン大隊に支払われる賃金で西部へ移住する家族が助けられ、兵隊も1年の兵役が済めばカリフォルニアで銃と衣服を貰い受けて解かれるようになっていた。

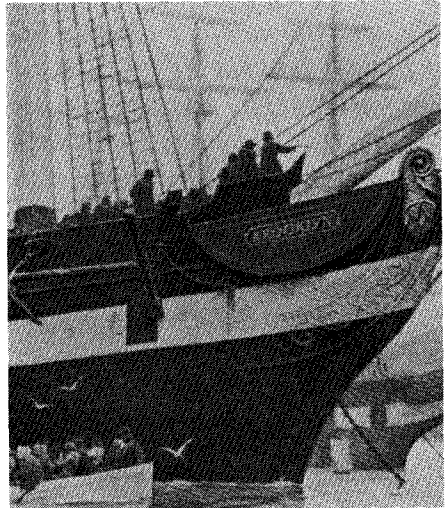
ブリガム・ヤング長老と十二使徒会の勧めによって、500名を上回る義勇兵が集まった。そして7月20日、大隊はモルモン教徒でない職業軍人のジェームズ・アレン大尉に率いら

れてカウンスル・ブラフスを出発した。のちに指揮官はサンタフェでフィリップ・セントジョージ・クック大尉に変わっている。その他の上官は教会の指導者が選んだ末日聖徒であった。ヤング長老は兵たちに、教会の教えに忠実であれば戦闘に参加しなくてすむと約束し、この約束は文字通り成就した。大隊が翌年の1月にカリフォルニア州のサンジェゴに着く前に、すでに他の軍隊がカリフォルニア北部を制圧したからである。モルモン大隊の戦闘といえば、ただ一度、リオグランデ川下流の砂地を越えていた時に歩兵を襲ってきた野牛の群れとの接触のみである。

徴兵に進んで応じたことで、当時の政府に対するモルモン教徒の忠誠が立証された。さらに3,200キロ以上に及ぶ大行軍は史上最長であり、聖徒たちが付けた道しるべは幌馬車隊の通る道となり、やがては大陸横断鉄道となったのである。

しかし合衆国陸軍に加わってカリフォルニアへ向かった聖徒たちの全員が、この厳しい行軍に耐え抜いたわけではなかった。数名が途中で死亡し、病気にかかり、行軍に耐えられなくなった150名ほどの聖徒は大隊を離れコロラド州のプエブロで冬を越した。そこで聖徒たちと兵士たちの洗濯を手伝うために同行していた女性の大半は、1847年早々とワイオミング州ララミー砦に向けて北上し、ブリガム・ヤングの開拓者の一団と共にソルトレーク盆地へ入った。同じくコロラドで冬を越していたミシシッピからの聖徒たちも共に、この新しいモルモンの故郷に第一歩を記したのであった。

ミズーリ川岸に建てられた町ネブラスカ州ウインタークオーターズは、丸太小屋と丘に掘った横穴住居ばかりの小さな町であった。1846年のクリスマスまでにそのような仮設の住居が700余りも立ち、そこで越冬した人は3500人にもものぼった。十二使徒会は冬の間に



1845年の暮れ、聖徒の西部への移住が決まると、ブリガム・ヤング長老は、サミュエル・ブラナンに、合衆国東部の聖徒たちを集めて、船でサンフランシスコに向けて発つように命じた。明けて1846年の2月4日、男性70名、女性68名、子供100名を乗せ、ニューヨーク港を出帆したブルックリン号は、約5カ月間の航海を終えて無事サンフランシスコ湾に到着した。1846年7月29日のことである。(さし絵、アーノルド・フライバーク画「ブルックリン号」)

143名の開拓者の先行部隊を組織した。そのうち3名が妻の同伴を許され、そのひとりふたりの子供を伴った。こうして148名から成る一団は73台の幌馬車に分乗し、1847年から48年にかけての冬に必要な物資と作物の種を運んだ。

この移民団をはじめ、後続の移民団はすべて1847年1月14日にブリガム・ヤングを通して与えられた主の啓示に基づいて組織された。現在は教義と聖約136章に記されているこの方法は、西部開拓の範例となった。これはアイオワ州を越える時の行進ですでに試験ずみの編隊方法であり、貧者や未亡人や孤児を世話する責任を改めて打ち出したものであった。こうして近代イスラエルの移住の旅の中で、聖徒たちは互いに助け合いながら約束の地へ向かうこととなるのである。

先行部隊が出発したのは4月であった。この先行部隊には8名の十二使徒が加わり、他の2名は同じ年に出発する後続部隊の先頭に立つことになった。先行部隊は小舟、地図、科学器機、農機具など万全の装備であった。ブラット川南岸沿いに走るオレゴンの道を来る移民団との衝突を避けて、新しく北岸の平原に道を拓きながら進んだ。周到な準備の甲斐あって、ウインター・クオーターズからソルトレーク盆地までの1,600キロの旅は比較的平穏であった。インディアンとの大きな問題も、大した事故もなく、厳しく統制された隊を乱す争いもなかった。旅の途中で十二使徒たちは東へ戻って行く開拓者や旅行者から目的地についての最新の情報を得ることもできた。

7月、一行がいよいよ旅の最後にさしかかった時、ブリガム・ヤング長老とその他の数人が山岳熱に冒され、一時期体が衰弱してしまった。彼らは後方に退いて体力の回復を待つことになった。それでも本隊は昨夏カリフォルニアに移住したリード・ドナー隊が残

した道しるべに沿って進んだ。山中を歩いてソルトレーク盆地に続くその道はやぶに覆われ、思うように前進することができない。しかしついに、先行部隊が峡谷の入口に到着した。7月21日、偵察に出ていたオルソン・ブラットとエラスタス・スノーは、グレートソルトレークの広大な湖と盆地を初めて目にするのができた。その翌日から、聖徒たちは続々と盆地に入ってきた。その日、オルソン・ブラットは土地を主に奉獻し、男たちに土地を耕し種をまくように指示した。種まきを終わると、男たちは水路を引き灌漑を始めた。

7月24日、ブリガム・ヤング長老と病人たちを抱えた部隊が盆地の入口に到着した。ウィルフォード・ウッドラフは自分の日記にこう記している。「私たちは広大な沃土の谷を驚嘆の思いで眺めた。ヤング大管長はこの盆地を見て、ここを聖徒たちの安住の地とすることに心からの満足を覚え、旅は十分に報われたと感じた。」そして後年ウッドラフ長老は、自分の幌馬車の上からふたりで盆地を眺め、ヤング長老が「まさにこの地だ。行こう」と語ったことを切々と語っている。

これは、その後おびただしい人数の聖徒たちを新しい避け所へ導くほんの始まりに過ぎなかった。1847年の12月までに2,000人を越える人々が困難な旅を終えてこの地に入植した。その年ヤング大管長と数百名の聖徒は家族を連れに、あるいは他の人々を支援するために東方へ引き返していった。開拓者の歩いた距離を入念に測定していたウィリアム・クレイトンは、新しい走行距離計を使って再度測定し直し、1848年に「末日聖徒の移住者ガイド」(*Latter-day Saints Emigrant's Guide*)を刊行した。このガイドには野営地間の正確な距離が記され、1847年以後の数千の開拓者たちに多大な益をもたらすことになるのである。

ステーキ部の急増に見る 教会の発展

先頃、1,000番目のステーキ部が組織された。これまでの発展の推移をたどっていくと、数多くの画期的な出来事がそこに横たわっていることがわかる。

これら1,000のステーキ部は、合衆国本土と世界中の40カ国の国々にまたがっている。その内訳は、最高が合衆国の761ステーキ部、次いでメキシコの51、カナダの21となっている。

大陸別に見ると、北アメリカが782で最も多く、続いて（メキシコを含む）中央アメリカの61、南アメリカ52、南太平洋地域37、アイルランド、イギリス30、ヨーロッパ大陸22、アジア14、アフリカ2である。

1895年、ステーキ部は34に達していたが、この年に合衆国外に初めてステーキ部が組織された。6月9日にカナダのアルバータ・ステーキ部、そして12月9日にはメキシコにフアレス・ステーキ部が組織された。

その後も合衆国内には数多くのステーキ部が組織された。しかし、アメリカ大陸以外の地にステーキ部が組織されたのは、63年後の1958年5月18日、ニュージーランドのオークランド・ステーキ部まで待たなければならなかった。しかし1960年代になると、各国にステーキ部が次々と組織され、1960年だけでも10のステーキ部が組織されている。オーストラリア初のステーキ部、シドニー・ステーキ部、英国初のステーキ部、マンチェスター・ステーキ部が組織されたのもこの年であった。

翌年、ドイツにも最初のステーキ部がベルリンに、そして矢継ぎ早にシュツットガルト、ハンブルグにステーキ部が組織された。そのほか、1960年代に初めて国内にステーキ部が組織された国々は、スコットランド（1962年）、ブラジル（1966年）、グアテマラとウルグアイ（1967年）、トンガ（1968年）、サモア（1969

年）などである。

また1970年には、日本、ベルー、南アフリカに最初のステーキ部が組織された。さらに1972年にタヒチとチリに、1973年にフィリピンとエルサルバドルに、1974年にアルゼンチン、アイルランド、デンマークに、そして1975年にはウェールズ、スウェーデン、フランスの国々に最初のステーキ部が組織された。

そのような中で、メキシコシティー地域で爆発的な勢いでステーキ部が誕生し始めたのが1975年の11月であった。それまで5つしかなかったステーキ部に加えて、メキシコシティー伝道部の中から新たに15のステーキ部が誕生したのである。

台湾、香港に初めてステーキ部が組織されたのは1976年である。明けて1977年には、コスタリカ、コロンビア、ベルギー、ホンジュラス、ノルウェー、ベネズエラ、フィンランドの7カ国に初めてステーキ部が組織された。

1978年には、エクアドル・グアヤキル・ステーキ部、また北アメリカのフランス語地区に初めて、ケベック・モントリオール・ステーキ部が組織された。

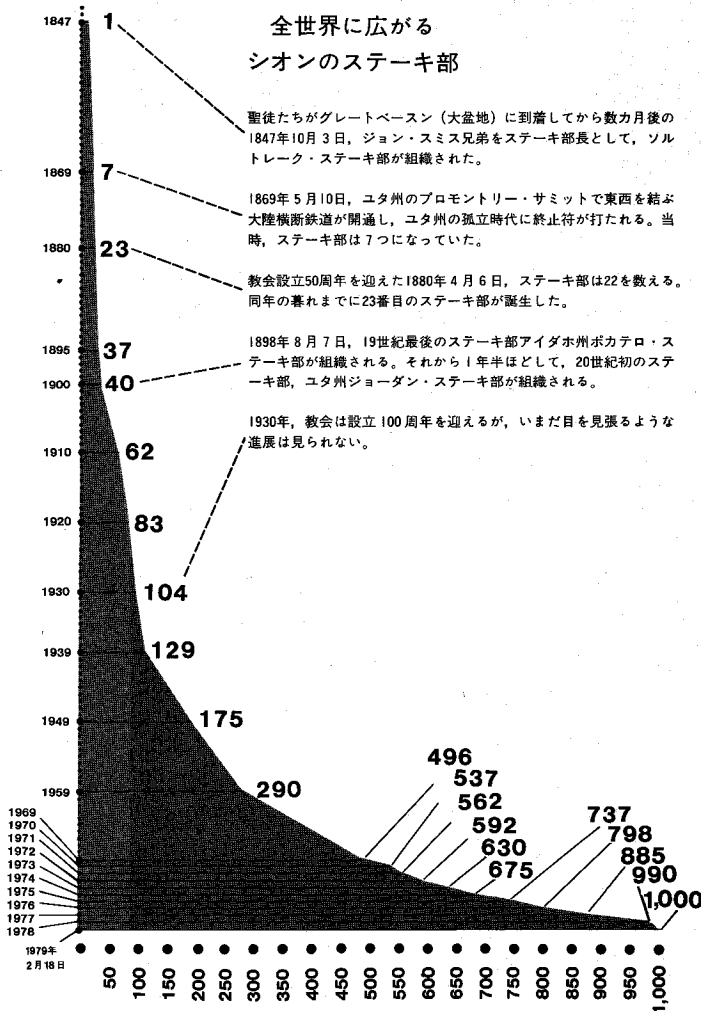
こうして1979年2月18日、イリノイ州のノーヴーに1,000番目のステーキ部が組織されるに至ったのである。

日本におけるステーキ部も著しい発展を見せている。1970年3月、日本で初めて組織された日本東京ステーキ部は、1974年に横浜ステーキ部に分割され、さらに1977年には東京北ステーキ部に分割されている。また東京に日本初のステーキ部が組織された2年後の1972年には、大阪ステーキ部が誕生し、この大阪ステーキ部も1977年の10月には大阪北ステーキ部と分割されている。そして、1978年には名古屋と札幌にステーキ部が誕生し、先頃1979年4月には、日本で8番目のス

ステーキ部が福岡に組織された。主は今まさに、主の完全なプログラムを日本全国の民に与えんとそのみ手をかかえておられるのである。

聖典には、ステーキ部とは靈感により「汝(主)の定めたまいし場所」(教義と聖約109:39)であって、「防禦のためとなり、また暴風雨の避所となり、^{まげどころ}憤りの……^{いきどお}避所」(教義と聖約115:6)となる、と記されている。まさにシオンのステーキ部とは、「(1)すべての会員に福音にかなった生活をさせ、(2)すべての

人が真理の原則を受け入れるように、福音を麗わしいものの象徴とする」(スペンサー・W・キンボール「ステーキ部とは」十二使徒会地区代表セミナー、1973年10月4日)という目的を持っている。このような神の完全な恩恵にあずかることのできるステーキ部が日本の方々に堅く立つときに、日本の民は神に近い清い民としてますます大いなる祝福を享受することができるであろう。



モルモン・タバナクル合唱団を 迎えるにあたって



川越ワード部
柳田 聡子

モルモン・タバナクル合唱団が日本で公演する！ このニュースを耳にし、私は期待で胸をふくらませています。第二次世界大戦も終わり、敗戦のわびしい日本に福音の光がもたらされ、若い宣教師が日本で伝道を始めた時、讃美歌を抜粋した小冊子の讃美歌集が集会で使われていました。その本の表紙に見慣れないデザインが載っていました。それが世界に誇るソルトレーク・タバナクルの大パイプオルガンであることを知ったのが、1949年のことでした。その頃は毎週日曜日の朝、進駐軍向けラジオ放送で、このコーラスが放送されていました。けれども当時私たちは、その美しい合唱をじかに聴けるようになるとは、夢にも思いませんでした。

それから20年後の1969年、日本沖繩伝道部の扶助協会会長を務めていた時に、ソルトレークの扶助協会中央管理会から扶助協会の年次総大会に出席するようにとお手紙をいただきました。当時の伝道部長は岡崎伝道部長でした。岡崎夫妻のすすめがありましたので、

個人で行くのは大変でしたが、それでも思い切って出席させていただくことにしました。そして扶助協会の大会に出席し、会長のスパフォード姉妹にお目にかかりました。その週は教会の総大会が開かれていましたので、総大会にも出席しました。また岡崎伝道部長が以前所属していたステーキ部の扶助協会会長であるシェイ姉妹のお宅を紹介され、そこに泊めていただきました。岡崎伝道部長とこのシェイ姉妹の特別な配慮により、私が日本の讃美歌の翻訳者であると紹介されていたので、総大会の日曜日の朝早くひとりのタバナクル合唱団の団員がシェイ姉妹の家に私を迎えに来て下さいました。この姉妹は「ヴァージニア」と紹介され、私は「としこ」と紹介されました。シェイ御夫妻は自宅にいてテレビで大会を見るからということで、私はヴァージニアと共にタバナクルに出かけ、7時半にそこに着きました。そしてタバナクル合唱団のソプラノの一番後ろの席（一番上の席）に案内されました。その時、6、7枚の楽譜

を渡され、今から練習があるから一緒に歌いなさいと言われました。その席に座るだけでもうれしくて胸がワクワクしていた私は、楽譜を渡されて本当に感激致しました。指揮者はあの映画で見たことのある背の高いコンディ兄弟でした。彼が合図をすると、団員はすぐに歌い始めました。少しのよどみもなく美しい歌声があつたタバナクルの円い天井に響き渡りました。そして、次々と指揮者の指示に従って歌いましたが、隣席の姉妹は「コンディ兄弟はどれを歌うかその時によって違うので私たちにもわからないのです」と説明して下さいました。そして時々ちょっとした注意を受け、幾つかの曲を練習しました。私は初めて見る楽譜ですし、英語なので、音程を正しく歌うことに一生懸命で何の歌だったか無我夢中で覚えていません。そのうちに、9時近くになり、いよいよ9時から本番でラジオ放送が行なわれるという指示がありました。本番で歌う歌はその朝練習していたものではなく、ほかの曲でした。隣席の姉妹は、「コンディ兄弟はどれを指定するかいつもわからないんです」とにっこり笑って言いました。いよいよ歌い始めた本番の歌は実に美しくハーモニーしていて、広いタバナクルに響き渡りました。その突然の指示にもかかわらず、(彼は自信をもっておられるからでしょうが) そんなに素晴らしく歌える合唱団の能力に私は感動しました。(もちろん本番では私は黙って聴いていました) 私は20年間の憧れの場あこがにいることに大きな幸福感を味わい、その機会を本当に感謝しました。その日の昼はホテルユタ(テンプルスクエアからすぐ近い所にあります)のグリルで、合唱団団員の昼食会があるから一緒にくるようにとヴァージニアに誘われて、そこにも出席させていただきました。姉妹たちは皆オレンジ色のブラウスに、黒のスカートという揃いの服装でしたので、私ひとりだけ

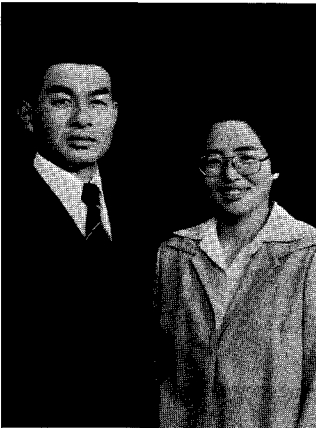
違う普段の服装なので目立つのも恥しいと思いましたが、この素晴らしい方々の仲間に一時だけでも入れていただけるのが嬉しくてヴァージニアについて行きました。年齢は様々で、若い人もいれば、子供がすでに大きくなったヴァージニアのような方もいました。楽しい歓談の食事でした。私は同じテーブルで食事した方々の写真を撮らせていただきました。食後、廊下に出るところでオルガニストのシュナイダー兄弟にお会いしたところ、ヴァージニアが私のことを紹介して下さいました。すると、彼は次の土曜日夜にリサイタルがあるからということで、そのパンフレットにサインをし、招待して下さいました。私はますますうれしくて興奮してしまいました。私を案内して下さいましたヴァージニアは若い時からこの合唱団の団員で、子供を育てる間一時中断した後、また戻ってもう15年も続けているということでした。練習日には必ず出席し、日曜日は毎週早朝から出かけて行くということで、美しい立派な合唱の陰の努力、御苦労というのを感じました。ずっと以前に合唱団員の厳しい練習、指揮者の鋭い耳、入団するための厳しいテスト等を紹介した映画を見たことがあり、その成果ともいふべき練習風景の一部を実際に見せていただけたことは本当に有り難いことでした。世界一を誇り得る素晴らしい合唱はそれだけの価値を生む下地があることを知っています。お祈りして歌う彼らの歌声はまさに天使の歌声です。

あれから10年経ちましたが、その天使の群が近くこの日本にきて各地で歌い、NHKテレビでも歌って、日本中にその歌声が響き渡る日がやがてくるということは夢のような気がします。日本の地に神殿が建ち、30年前までは憧れ以外あこがに考えられなかったタバナクル合唱団の来日に、神様のみ業の発展に深く深く感謝せずにはおられません。

新伝道部長召さる！

3年間の任期を終えられた5人の伝道部長（鈴木正三兄弟、ハリソン・T・ブライス兄弟、田中健治兄弟、ウィリアム・H・名幸兄弟、山田五郎兄弟）に代わって、新たに以下の兄弟たちが7月1日付をもって召されました。

これまで伝道部長を務められた兄弟ならびにそのご家族に心より感謝するとともに、新伝道部長ならびにそのご家族の上に神様の導きと祝福がありましよう心よりお祈りいたします。



堀田徹，幸子伝道部長御夫妻

これまで教会教育部地域担当部長の責任を果たしていた堀田伝道部長がこの教会に改宗したのは、1964年4月12日であった。

堀田兄弟は静岡大学工学部を卒業，教会では日曜学校会長，支部書記，副支部長，地方部評議員などを歴任。

堀田姉妹はインスティテュート家庭学習コース教師，扶助協会の教師，会長，地方部扶助協会副会長などの責任を果たしている。

任地は日本札幌伝道部。

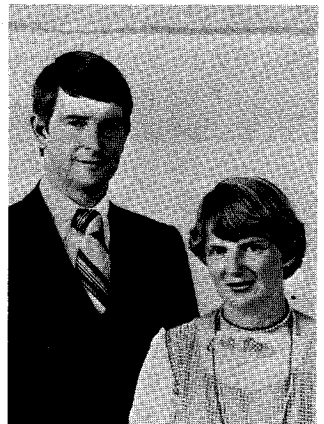
マイケル・A・ロバーツ， クリスチーン・A・ロバーツ伝道部長御夫妻

新しく召された伝道部長の中で一番若い（28歳）ロバーツ伝道部長は、1969—71年の間、日本東伝道部で宣教師として働き、今回は日本における2度目の伝道活動である。

ロバーツ伝道部長はオークランド大学で学士，修士号を取得し、これまでオークランド小学校の教師として勤務する傍ら、ニュージーランドのオークランド・ハーバースターキ部の高等評議員兼若い男性会長の責任にあつた。

クリスチーン姉妹は、これまでセミナー教師，初等協会教師，扶助協会副会長，初等協会会長，スターキ部初等協会管理会員などを歴任。ふたりの子供がいる。

任地は日本東京北伝道部。





相良健一，真由美伝道部長御夫妻

新しく伝道部長として召されるまで、地域担当教会幹部菊地良彦長老の幹部書記として責任を果たしていた相良兄弟は、これまで支部やワード部での責任のほかに、副地方部長、副ステークス部長、高等評議員などを歴任。仕事は、健康食品のコンサルタントおよび損害保険の代理店を開いていた。

相良姉妹もワード部扶助協会会長などワード部における数多くの責任を果たし、今回の召しを受けるまでは、所属の日本横浜ステークス部で、ステークス部扶助協会管理会員とワード部日曜学校主任教師を兼任していた。

任地は日本名古屋伝道部。

岡本亮，好子伝道部長御夫妻

岡本伝道部長は、1963年4月14日に京都で改宗。京都大学工学部を卒業。伝道部長として新しい召しを受けるまで、アジア地域管理本部情報管理部部長として、書記、統計部門の指導と管理に従事。教会では、アロン神権ディレクター、副支部長、支部長、ワード部副監督、高等評議員、副ステークス部長などを歴任、そしてこの度の伝道部長の召しを受けるまで日本東京北ステークス部のステークス部長としての責任にあった。

岡本姉妹も日曜学校や初等協会の教師のほかに、ステークス部初等協会主任教師、子供日曜学校主任、扶助協会会長などの責任を果たしてこられた。4人の子供がいる。

任地は日本岡山伝道部。



ロイ・I・津谷， ウタ・津谷伝道部長御夫妻

津谷伝道部長は、1941年11月16日にハワイのカパアで改宗。LDSビジネス・カレッジを卒業後、デゼルト出版会社に勤務。これまで日曜学校会長、YMMIA 会長、副支部長、支部長を歴任し、新しく伝道部長として召されるまでは、ソルトレーク・リパティーステークス部第1支部（日本語支部）の日曜学校教師の責任にあった。

一方、ウタ姉妹は初等協会、扶助協会、日曜学校などの教師のほかに、初等協会、扶助協会の各会長の責任を果たしている。

任地は日本福岡伝道部。



